



水大学園だより

独立行政法人水産大学校 〒759-6595 下関市永田本町2丁目7-1 電話083(286)5111
ホームページ <http://www.fish-u.ac.jp> [発行] 学生課

ご挨拶

— 明るい未来志向の水産人が世界を変える —

校長 濱野 明



昨今、大学改革が叫ばれ、「大学教育の質的転換に向けて」というキーワードで、教育の質保証、ミッションの再定義など、大学教育のあり方そのものを取りざたされることが多くなってきました。これは少子化により受験生が減少し、計算上では大学全入時代に入ったことにより、大

学の教育レベルの低下への警鐘とも捉えることができます。

このような中、水産大学校では、大学評価・学位授与機構による学士・修士教育課程の認定、また、JABEE（日本技術者教育認定機構）の認定を受け、教育の質保証を行っているところです。この大学評価・学位授与機構による学士・修士課程の認定では、教員の学位、教育研究業績、さらに教育施設などがこと細かく審査されます。また、JABEE認定では、ワシントンアコード認定大学卒業生と同等の学業レベルを保証するため、外部機関が本校の教育内容と質を評価し、水産大学校が世界標準の大学教育を行っているかの認定を受けるものです。さらに、本校は、2011年に締結されたユネスコ「アジア・太平洋における高等教育の認定に関する地域条約」における高等教育機関の一つとして位置づけられているところです。この条約はアジア太平洋地域内における高等教育機関の間で、単位や学位の相互認定やその他高等教育機関への入学、進学条件の互換性などの原則を定めたもので、世界の高等教育機関におけるグローバル化が進む中、水産大学校が National Fisheries University として、まさにそ

の教育内容と質が世界標準を満たしていることが評価されたものと考えております。

私が水産大学校校長を拝命してから1年と数ヶ月たちました。「明るい未来志向の水産人が世界を変える」という旗印のもと、今年度の入学志願者総数は独法移行後、最高の1061名に達し、また就職率も97%、そのうち水産業及び関連分野への就職・進学は84%と、皆様のご協力のもと、着実にその教育研究の成果を上げているところです。

ご承知の通り、水産大学校は実学教育を旨としております。それは、学生諸君が教室での学びに加えて「実際に行って見てやろう」、そして「実際にやってみよう」、という積極的な行動を通して、「自分の力がわかる」、「社会が何を必要としているかわかる」、「将来何をすべきかわかる」という実践的教育から、ものの本質を見極め、新境地を開拓する能力を身に付けることを目指してもらいたいという思いがあるからです。そして、水産大学校での教育課程を修めて社会に出たとき、どこの国の誰にでも「正しい海と魚との付き合い方」を堂々と強い信念をもって語れる水産人に育てて欲しいと心から願う教職員の思いがそこにあります。

ここ数年のうちに予定されている水産大学校と水産総合研究センターとの統合後においても、本校で行う教育研究については、基本的な変更やカリキュラム、取得可能な資格などの見直しはなく、さらに充実した教育環境を学生諸君に提供できるものと考えております。近年、急速に進むグローバル化の中で、将来にわたって海の恵みを国民全体が享受するためには、国際的な広い視野を持ち、かつ水産の現場に精通した具体的な知識と行動力を持った人材が必要となります。まさに本校で学んだ学生諸君の役割が今後の水産業において益々重要となります。

水産大学校がいつまでも世に誇れる水産教育研究の最高学府として、そして卒業生が自信を持って誇れる母校であり続けるよう教職員一同、一丸となって全力で務めて参る所存です。関係各位におかれましても今後とも、より一層のご支援とご協力を賜りますようお願いいたします。

最近の話題

「JICA研修」について

水産流通経営学科 助教 西村 絵美

水産大学校では、毎年、独立行政法人国際協力機構（JICA）の依頼を受け、海外研修員受け入れ事

業を実施しています。今回は、平成26年4月4日～6月6日に本校にて行われたJICA課題別研修「漁業者組織を核とした地域水産業の持続的発展に寄与する政策立案（水産振興計画）能力の育成強化」コースの様子をご紹介します。

本年度の研修は、地域水産業・漁村の実態を現場

に出て学ぶことで、水産行政官としてその地域に合った水産振興計画を立案する能力を高めることを目標に実施されました。アルジェリア、ガンビア、セネガル、ナミビア、モーリタニア、モロッコ、スリナムの7ヶ国から9名の海外研修員（行政担当者）が本校を訪れ、約2ヶ月間にわたって研修に励みました。研修期間の前半は、各国の研修員が自国の水産業の抱える問題とその原因を互いに分析し合うワークショップと、水大講師陣による座学形式の講義。後半は、フィールドでの実地研修がメインで、萩市の現地調査をはじめ、水産庁、全漁連、漁済連、山口県庁への研修旅行、山口県外海栽培漁業センター、下関市栽培漁業センター、下松市栽培漁業センターの見学等が関係機関の協力を得て実施されました。その他にも、山口県漁協彦島支店、山口県漁協周南統括支店、東京都築地市場、下関漁港市場、奥野蒲鉾工場などの視察・見学を行いました。

今年度コースで新たに企画した萩現地調査では、2泊3日の日程で海外研修員とともに萩市の水産関係機関を訪問しました。1日目は、山口県漁協はぎ統括支店で、支店長より萩の魚のブランド化や、資源回復のための取り組みについてお話を伺った後、3つの班に分かれて越ヶ浜支店の漁業者の方々から漁業実態等についてのヒアリングを行いました。2日目は、午前4時より萩地方卸売市場を見学し、午後は萩市役所にて、水産課の担当者から萩市の水産業の現状と水産施策について説明を受けました。最終日は、道の駅「萩しーまーと」で、駅長の中澤さかな氏より、当該施設が地産地消の拠点として地元の第一次産業を支えていることや、萩の魚のブラン



「萩しーまーと」での中澤さかな氏による講義



「山口県漁協はぎ統括支店」での漁業者を交えた議論



アクションプラン作成に向けた議論

ド化、地魚の無料試食イベント、新商品の加工販売など、地元の情報を積極的に発信することで萩地域の発展に貢献していることを学びました。最終日の午後は、3日間の現地調査で把握した情報をもとに、班ごとに萩市水産業の振興策を考え、現地で発表会を行いました。

研修の最終段階では、日本での学びの集大成として、各研修員が自国の水産業振興のためのアクションプランを作成し、発表しました。発表会には、本校の学生も多数参加し、研修成果に耳を傾けました。水産業の実態、抱えている課題は国によって様々ですが、海外研修員が行政官としての使命を持って、国を超えて地域水産業についての理解を深めようとする姿は大変印象的でした。今次研修の成果が本国での水産業の発展に活かされること、また研修員9名の今後ますますのご活躍を祈念したいと思います。



閉講式

着任のご挨拶

海洋生産管理学科 准教授 若林敏江

平成26年4月1日付けで海洋生産管理学科・資源管理学講座に着任いたしました若林敏江と申します。専門は頭足類の資源生態学です。



私は東京都墨田区で生まれ育ち、東京水産大学（現東京海洋大学）に入学後、同大学院水産学研究所博士前期課程、後期課程と進学し、大学ではおもに頭足類の稚仔の形態分類や分布、群集構造に関する研究を行ってきました。学位取得後は、科学技術振興事業団の重点支援課題「海洋動物のゲノムタイピング」に携わることとなり、遠洋水産研究所（現水産総合研究センター国際水産資源研究所）に勤務し、形態と遺伝解析の両面から頭足類の分類の研究を行うとともに、所属研究室が対応していた外洋性アカイカ類の資源動態・管理に関する研究も行ってきました。

日本人はイカをよく食べます。山口県でもケンサキイカやアオリイカなどおいしいイカが獲れますが、実は他にも全容を見る機会のないアメリカオオアカイカやアカイカなどの日本から遠く離れた海域で漁獲されたイカをたくさん消費しています。これらのイカは資源量も多く、主に加工製品の原料になっています。イカは一年という短期間に成長し死んでいきます。そのため環境の影響を受けやすく、資源変動が大きい生物です。水産総合研究センター勤務時

は、遺伝解析手法を用いた系群解析や繁殖生態の研究に加え、数か月間調査船に乗船しこれらの外洋性イカ類の資源調査を行ってきました。現場では、データだけを見てはわからない資源動態に関わる様々な情報を得ることができ、また海外の研究者との交流も、対象資源を多面的に捉えるよききっかけとなったと感じています。水産資源は、沿岸性種から外洋性種まで多岐に渡っております。本校では今までの経験を活かし、地域に密着した魚種も視野に入れ、幅広い視点での水産資源学の教育・研究を行っていきたくと考えております。

こちらへ着任してまだ日が浅いですが、目標をしっかり定めまじめに取り組んでいる学生の姿はよい刺激となっております。また他校には見られない本校の実学重視の教育は、研究機関に在籍していた私にはとても新鮮であるとともに、私自身水産業を担う人材の育成に携わっていくことを強く実感し、身が引き締まる思いが致します。何かと至らぬ点もあるかと存じますが、ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

着任のご挨拶

海洋機械工学科 助教 石田 雅 照



6月1日付けで海洋機械工学科船舶用機関学講座の助教を拝命いたしました。

まずは皆様よろしく申し上げます。私は、生まれも育ちもここ下関であり、関門海峡を行き交う船を眺め、そして山陰方面に足を伸ばせば穏やかな響灘の潮のにおいを感じながら育ってきました。この度縁あってか母校で後輩の指導に当たれる機会をいただけたことを嬉しく思っております。専攻科を修了し十数年ぶりに訪れた学校は校舎もきれいに整備され、新たな施設も増設されており私が在籍していた当時に比べ見違えるようになりました。また、私が学生時代にお世話になった先生方がまだ多く在籍しておられますので、私が先生と呼ばれることが妙にくすぐったく感じられます。ただ、今も昔も変わらないのは素朴な吉見の人たちと、正門からの海の眺めでした。

こちらに就く以前は専攻科を修了後、平成13年から13年間共同船舶株式会社という漁業会社に勤務し鯨類の目視および捕獲調査に従事しており、そこでは9度の南氷洋航海を経験することができました。入社後の8年間は機関士として乗務し、後半5年間は陸上勤務員として工務関係の仕事をしておりました。折しも今年の3月31日ICJの判決により南極海での調査捕鯨が違法であるとの判断がされたことは残念でしたが、全ての水産資源について有効かつ効率的に利用していくことが人類共通に認識となっていくためには、まだまだ時間がかかることを認識させられました。

会社務めという一つのキャリアを終えて、新たに教育・研究の世界に飛び込んだ訳ですが、今までの

企業人としての経験をどのようにこれからの仕事に反映させたらよいか、後輩たちに学識や技術のみならず何をアドバイスすればよいか日々の業務の中で常に自問自答しております。前職の工務担当の5年間は陸上勤務ということもあり、新規採用者に対する人事関係者からの評価をたびたび耳にする機会がありました。中には真向に職務へ取り組む姿勢があっても、周囲とうまく溶け込んでいけない者もいるという話を何度か聞きました。まずは自分が飛び込んだ世界に順応していくこと。そのために企業が学生に求める能力の一つとしてコミュニケーションの力を挙げられております。私自身、今までの経験から相手の立場を理解し、個性を認める度量を持つことがコミュニケーションの土台になるのではないかと考える様になりました。これをもとに職員・関係者の皆様や、後輩である学生たちとよりよい人間関係を作っていけたらと思っております。

まだまだ若輩者ですので、何事も謙虚に教わる姿勢を持ち続け本校での教育・研究に日々邁進する覚悟ですので、今後とも皆様のご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

着任のご挨拶

食品科学科 准教授 池 原 強



平成26年4月1日付けで食品科学科食品機能学講座に着任しました池原強（いけはらつよし）と申します。専門は海洋天然物化学、生化学、分子生物学です。本学では1年生の「基礎化学」と2年生の「分析化学実験」を担当しています。

私は、沖縄県出身で、琉球大学理学部生物学科を卒業後、琉球大学理学研究科及び、同医学研究科で学び、学位（医学博士）取得後は、埼玉医科大学での研究員生活を経て長崎大学医学部の助手、講師の職を経験してきました。その後、沖縄県にある民間企業の研究開発部門において産学官連携プロジェクトに参加した後、再び長崎大学の医学部に戻り2年間の研究生生活を経て下関の本校へ赴任しました。埼玉医科大学、長崎大学の医学系研究室では「遺伝子転写制御機構」の研究を行い、民間企業の研究部門では「生物資源の高度利用技術の開発」を研究テーマにしてきました。水産大学校では、食品を含めた水産生物資源の機能解析を行い、水産業振興に貢献できる情報を発信していきたいと考えています。

食品科学の分野では、食品成分の機能性解析と同時に食品の安全確保に対する関心が高まっており、これらの研究を目的とした新たな技術開発が求められております。このような状況の中、私は、「食品や環境中の有毒成分の分析法開発」や「生物資源の有効利用」を目的とした応用研究を行い、下痢性貝毒やシガテラ等の魚毒について、その検出法に関する技術開発や開発した技術を利用した製品開発を行ってきました。貝毒や魚毒を含めた自然毒による食品

及び海洋環境汚染は世界の多くの国や地域にみられ、これら有毒物質の検出法の開発、毒性機序の解明は、我々の生活の安全を確保するために重要な研究テーマであると考えています。これらの研究によって蓄積された技術は、水産生物資源からの機能性物質の探索にも応用できると考えており、これらの研究の成果を本校での教育活動に活用したいと考えています。

私がこれまで行ってきた分子レベルでの研究分野において得た知識や経験を水産大学校における教育と研究に活かし、社会が求める人材の育成に努める事によって、地域や社会全体へ貢献していきたいと考えております。何かと至らぬ点多々あるかと存じますが、水産大学校で必要とされる教員像を確立するため日々努力する所存でございますので、皆様のご指導、ご鞭撻を賜ります様宜しくお願い申し上げます。

着任の御挨拶

生物生産学科 助教 吉川 廣 幸



平成26年4月1日付で生物生産学科資源増殖学講座に着任いたしました吉川廣幸と申します。本学では、「栽培漁業技術論」と「水族遺伝育種学」の講義を担当させていただきます。私の行っている研究内容としては、魚類を中心とした育種・増養殖における発生遺伝学、繁殖生理学および発生工学を専門としています。

私は、長野県飯田市の出身で、山々に囲まれた環境で育ちました。実家のすぐ側にはヤマメやアマゴが生息する河川が流れていたため、よく川遊びをして過ごしたものです。そのようなこともあり、実家は農業を営んでいますが、いつの間にか水産生物や水産業に興味を持ち、高知大学農学部栽培漁業学科へ進学しました。大学院からは、北海道大学大学院水産科学院へ進学し、水産科学の学位を取得しました。大学院では、北海道の北東部の一部の地域に生息している、クローン繁殖するドジョウを研究材料として、その配偶子形成機構に関する研究を進めてきました。ドジョウは他の多くの生物と同じく半数性の卵をつくりますが、クローンドジョウは配偶子形成過程において染色体数の倍加現象が起こり、その結果生み出されるクローン卵が雌性発生することによりクローン子孫がつけられていることを明らかにしました。学位取得後は、観賞魚関連の民間企業（神畑養魚株式会社）への勤務の後、東京海洋大学において博士研究員として研究活動を行ってきました。前職の博士研究員としての研究活動では、海産魚における「代理親魚技術」の開発を進めてきました。代理親魚技術とは、精子や卵の元となる細胞（生殖幹細胞）を異なる魚に移植することにより、異なる魚、すなわち代理親から、移植した細胞に由来する精子や卵を作り出す技術です。この技術によ

り、ヤマメを代理親として、ニジマスが誕生しています。現在、本校でもこういった発生工学に関する技術も取り入れつつ、海産有用水産物の増養殖に関し、研究活動を進めているところです。

近年、水産天然資源の減少が国内外で大きな問題として取り上げられています。水産物の安定供給を行い、水産業の発展を図るためには、水産育種・増養殖に関わる繁殖制御技術、増養殖技術、そして育種技術のさらなる進歩が求められていると考えています。何かと至らぬ点多々あるかと存じますが、今後の水産業の発展のため、そして将来を担う人材の育成のため、研究・教育活動に励んでいきたいと考えています。どうぞ、これから、ご指導ご鞭撻の程、宜しくお願い致します。

ご挨拶

耕洋丸 三等機関士 榊 良 祐

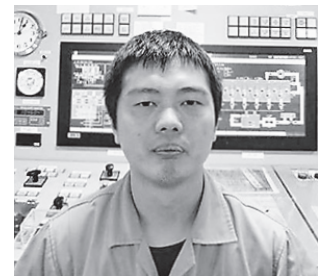
4月より練習船「耕洋丸」の三等機関士として赴任いたしました、榊と申します。

私は、本校海洋機械工学科、専攻科船用機関課程を卒業後、水産庁に入庁致しました。

水産庁では漁業調査船「開洋丸」に配属され、三等機関士として4年間勤めた後に、本船へとやって参りました。

開洋丸は、主に研究者・調査員を乗せて漁業に関する調査を行います。私が乗船していた4年間では、絶滅の恐れがあるとされているニホンウナギの調査やアメリカオオアカイカの調査などに携わることが出来ました。開洋丸は、外航が多く、燃料油補給の為に外地に寄港します。それぞれの寄港地で現地業者とやり取りをして燃料油積込みを行うことは、ものすごく良い経験となりました。アメリカオオアカイカの調査では、ハワイ、ペルー、タヒチに寄港し異文化に触れる機会もあり、貴重な経験をすることが出来ました。

三等機関士として配属されたので、就職1年目から空調機・漁船冷凍機・油清浄機など多くの担当機器を持つことになりました。担当機器のトラブルが多かったのですが、就職1年目の時は上司の指示で対応することしか出来ませんでした。しかし、経験を積むにつれて、原因や対応を自分で考え、解決することが出来るようになりました。機器のトラブルは機関士としての自分を成長させてくれますし、実際に機器に触れることで、身に付くことが沢山あります。学生も理論的なことは学校で学ぶ事が出来ませんが、実際に機器に触れて学べる乗船実習が学生にとっては一番成長出来る場であると思います。乗船してくる学生には、自分の経験を踏まえた実習を行い、乗船実習を充実したものにさせたいと思います。私もまだまだ未熟なところが有りますが、精一杯努力して学生を育てていきたいと思っています。



在校生の声

水大生になってからの日々

水産流通経営学科3年 原田拓海

水大に入学して早くも2年半が経ちました。想えば、入学時は初めての一人暮らしに不安を抱えながら過ごしました。料理や洗濯など、高校を卒業するまでほとんどしたことのない家事をいっぺんに始め、分からない事はすぐに両親や友達に相談し助けてもらう日々が続き、生活に慣れるまでは毎日必死でした。大学では、90分と長い講義に集中を保てず、苦戦が続きました。しかし、講義を聴くうちに自然に集中力も養われ、徐々に馴染んでいきました。

1年生の夏休み、私が所属する学科では「水産物調理・加工実習」を行います。彦島の漁業者にヒアリング調査をし、唐戸市場では、その歴史や市場での仕事を学びました。さらに、同級生と共に魚を捌き食しました。魚を「捕る」から「運び（流通）」、「調理・加工し」、「食す」までの一連の流れを実習から学んだ経験は、今でも学びのモチベーションとなっています。

それから2年、既に3年生となった私に残された学生生活は、もう2年もありません。自分の将来を決める大事な時期となり、忙しくもなってきました。これまでの学生生活で学んだこと、培った経験を活かして就職活動に挑んでいこうと思います。そして限りある学生生活1日1日を有意義に過ごそうと思います。

水産大学校に入学して

海洋生産管理学科1年 水落勇樹

水産大学校に入学して数か月が経ち、忙しい一人暮らしにも慣れてきました。今住んでいる下関の町はすぐ近くに海があり、漁港にはたくさんの船が停泊し、私が宮城県で見ていた沿岸部の町を思い出させてくれます。

中学校の卒業式の前日、東日本大震災が起きました。揺れが収まり、情報収集のためにラジオをつけると、仙台港に10メートルの津波が来るという当時の私には信じられないことが放送されていました。数日後、私は沿岸部のある町に行きました。その町に着くと、目の前の光景に言葉を失いました。車はあちこちに散乱し、船は打ち上げられ、家はほとんどがなぎ倒されていました。そこはすでに私の知っている町ではありませんでした。

約一年後、私がその町に行ったときにははがれきは片づけられ、更地同然となっていました。しかし、漁港では漁師の方達が水揚げを行っていました。彼らはあれだけの被害にあったにもかかわらず、前を向いて生きていました。

私は震災から自然の怖さと海で生きる人々の強さを知りました。水産大学校での4年間で水産学について

て学び、あの更地同然となってしまった町を再び活気ある町に戻し、海で生きる人々の役に立てるような人材になりたいと思います。

水大での大学生活

海洋機械工学科2年 山元一司

私が水産大学校に入学して1年が経ちました。大学生活や一人暮らしにも慣れ、同じ学科の人とは海技実習や乗船実習で、他の学科の人とはコース科目や部活動などで仲良くなれました。今では多くの友達を持つことができ、充実した日々を過ごしています。

勉学では1年次は英語や数学、物理といった基礎教養科目を主に学びました。2年次は私が所属する学科では熱や流体の力学といった専門科目、さらに工作機械を使って、機械の部品を作る実習もあり、専門分野を学んでいるという実感を持ちました。

部活動ではダイビング部に所属しています。ダイビング部は他の大学にはほとんどない珍しい部活です。水大は周りを海に囲まれているので潜る練習をするのには最適です。部活動では多くの先輩や後輩と一緒に練習する事を通して、先輩に対する礼儀や後輩を指導する大変さを知りました。

大学での活動以外では、アルバイトで塾講師をしています。アルバイトをすることでお金を稼ぐことがどれだけ大変なのか、また一人の社会人としての責任ある行動をすることがどれだけ大切なことなのかを身をもって知りました。

残りの大学生活は、海技士の資格やTOEICなどの資格に挑戦したりなど、具体的な目標を持って悔いのないように、1日1日を全力で頑張っていこうと思います。

大学生活を通じて学んだこと

食品科学科3年 松本摩耶

4年間の大学生活が早くも折り返しとなり、3年生からは本格的な専門分野の勉強がスタートしました。食品科学科では様々な講義・実験に加えて食品に関する実習が4つあります。3年生の実習では、水産大学校でしか経験することが出来ない洋上鮮度管理実習がありました。この実習では生きたブリを自分達で絞め、漁獲後の時間経過にともなう魚の鮮度低下について詳しく調べ、魚のおいしさを保つ方法について学びました。同時に、船という制約の多い環境での共同生活を通じて、船全体の安全確保には各自の責任ある行動が非常に大切であることを肌で感じながら学ぶことができ、とても良い人生経験となりました。

部活では水泳部に所属しており、入部当初はついていけなかった練習も一つ一つ克服し、今では厳しい練習をこなせるようになりました。これは決して

自分一人では成し得なかったことで、1つの目標に向けて専念し達成する楽しさを教えて下さった顧問の先生や先輩方、同輩、後輩のおかげでした。

私のこれまでの水大生活は、勉強だけでなく、身も心も少し強くなれた気がする楽しく充実した時間でした。これから始まる卒論研究や就職活動など大学生活でのビックイベントにも前向きに取り組み、ここでの経験も糧にしてステップアップしていきたいと思います。

水産の世界へ

生物生産学科1年 和田 渉

期待と不安の入り混じった気持ちで迎えた入学式から、あっという間に3か月が経ちました。初めての経験も多く、与えられたことをこなすだけで精一杯だったということもありましたが、とても充実していたように感じます。大好きな海を毎日見て、触れて、すぐ近くに感じ、海や魚、水棲生物について学ぶことができ、高校時代に思い描いていたような生活を送れているように思います。

しかし、私には海を少し怖いと感じた時期がありました。それは、3年前の東日本大震災による津波が原因です。しかし、今私が水産大学に通っている理由もこれにあります。津波による被害は受けていないものの、親しみのある町の変わり果てた姿を目の当たりにすると海が怖くなりました。しかし、海が好きという気持ちは強く、水産業の復興に役立ちたいという思いから水産の分野に進むことを決めました。

私の将来の目標は、津波に負けないような陸上養

殖を確立することです。水産大学校という、自らの手で勝ち取ったこの環境で多くのことを経験・吸収し、将来に生かすことができるようこれからの学校生活を有意義なものにしていきたいです。

研究科に進学して

水産学研究科1年 内田 渉太

私の所属する熱流体研究室では、熱流体に関するさまざまな研究を行っています。その中でも私は、真空凍結乾燥法について研究しています。この乾燥法は、一般的に知られているフリーズドライ製法の事を言います。この真空凍結乾燥法と魚や水産加工品等を組み合わせることによって、新しい発見が見つかるように実験を行い、材料の事を調べながら日々、努力しています。実験装置等も私自身で管理することにより、実験後のメンテナンスや新しい装置の組み合わせを考えることができ、どうすれば実験の効率が良くなるのかも分かるようになってきました。そして、普段の生活の中にも研究のヒントが見つかることもあります。スーパーに行った時に鮮魚売り場を見てみると、様々な特徴を持った魚がいます。この魚は骨が大きいなど考えることがありますが、その些細な考えも私の中では研究のヒントになり、新しい発見をすることが出来ました。また、研究科1年生の間は、年間を通して授業もあります。研究と授業の両立は、初めのうちは大変です。しかし、慣れてくると時間の使い方が上手になってきます。まだ勉強することは多くありますが、研究科で過ごす二年間の生活を楽しまたいと思います。

クラブ紹介

ソフトテニス部

ソフトテニス部部长
海洋機械工学科3年 小林 誠治

私たちソフトテニス部は現在、男子部員24名、女子部員2名おり、練習は月、水、金曜日の週3日やっております。時間は16時半からで、夏は19時まで、冬は17時半まで練習をしております。練習内容は人数によって基礎練習や試合形式で練習しております。

部員は中学校からの経験者や大学から始めた人もおりますが、皆楽しくやっております。また、大学2年から始めた選手でも、大会に出場し勝利するなど充実した練習の成果だと自負しております。

私たちが参加する主な大会は、春季山口県学生ソフトテニス大会と北九州・下関地区大学体育大会です。このほかにも他校との練習試合などにも参加しております。今年度の成績としては、山口県地区大会では、個人戦でベスト8に入ることが出来ました。

ソフトテニスは、硬式テニスと異なりダブルスしかありませんので、ペアの息を合わせることがとても重要な競技です。

試合は、ネットを挟んで2人对2人の戦いです。ネットがあるので、相手と直接触れることはありませんが、点を取り合う戦いです。また、頼りになる味方は1人しかおりません。しかし、ペアと協力して点を取り、ゲームを奪い、試合に勝つととてもうれしく、なんともいえない充実感があります。

私たちソフトテニス部はこれからも、チームワークを強めていき、大会でよりよい成績を残せるように、これからも頑張る練習に励みたいと思います。



学生部だより

平成25年度における就職対策と進路状況について

学生部長(就職対策検討委員長) 酒井 治 己

本校では学内に「就職対策検討委員会」を設置して学生の就職支援を行っています。委員会は、委員長(学生部長)と各学科長および1年生～3年生のクラス担当教員からなる委員で構成され、事務局として学生課がこれを補佐しています。

主な活動は、(1) 3年生を対象とした自己分析・自己発見のための職務適性テストの実施。(2) 就職活動の専門講師やその他様々な分野で活躍されている講師を招いた就職ガイダンスの開催。(3) 就職手引き書「UniCareer マガジン—大学生の就職編—」を3年生全員に配布し、これを用いた就職指導。(4) 各学科の就職担当者および学生部職員が、水産

関連企業・団体等を訪問し、本校および本校学生の紹介を行うとともに、訪問企業等の人事計画や採用情報の把握。(5) 毎年1月末に開催している合同企業説明会(来年度は3月上旬開催予定)等です。

特に、本年1月25日(土)に開催された、本科3年生、専攻科進学予定の4年生および研究科1年生を対象とした合同企業説明会には、近年の不況にもかかわらず、本校からの採用実績のある企業82社の参加があり、企業側、学生側から熱心な説明や質問が行われ、参加した学生からも好評を得ました。

このような活動の結果、平成25年度卒業・修了者の就職希望者159名(本科100名、専攻科51名、研究科8名)の就職率は96.9%で、このうち水産関連分野に81.2%が就職しました。

なお、本科、専攻科、研究科における進路状況および進学・就職内定先は別表の通りです。

平成25年度卒業・修了者の進路状況

平成26年3月31日現在

本 科 専 攻 科 研 究 科	修 卒 了 業 者 及 び 数	進 学					就 職 希 望 者 数	就 職 率 (%)	就 職 分 野										進 路 未 定 者 数	就 職 率				
		大 学 院	研 究 科	専 攻 科	研 究 生 等	進 学 者 合 計			試 験 準 備 そ の 他	水 産 関 連 分 野										内 定 者 合 計	水 産 関 連 分 野 者 就 職 希 望 (%)	水 産 関 連 分 野 者 就 職 内 定 (%)	全 体 就 職 率 (%)	
										国 家 公 務 員	地 方 公 務 員	各 種 団 体	漁 業 ・ 養 殖	水 産 加 工	水 産 流 通	調 査 開 発 等	資 材 供 給	小 計						そ の 他 分 野
水産流通経営学科	男	15				1	1	14		2				1	7			10	4	14	0	71.4	71.4	100.0
	女	3					0	1	2						2			2	2	2	0	100.0	100.0	100.0
計		18	0	0	0	1	1	16	0	2	0	0	1	9	0	0	2	12	4	16	0	75.0	75.0	100.0
海洋生産管理学科	男	36	3	4	21	1	29	7					1	1	2		2	6	1	7	0	85.7	85.7	100.0
	女	9	1		6		7	2							2			2	2	2	0	100.0	100.0	100.0
計		45	4	4	27	1	36	9	0	0	0	1	1	4	0	2	8	1	9	0	88.9	88.9	100.0	
海洋機械工学科	男	28		1	21		22	1	5						2		3	5	5	0	100.0	100.0	100.0	
	女	6		1	2		3	3							2		2	2	1	3	0	66.7	66.7	100.0
計		34	0	2	23	0	25	1	8	0	0	0	0	2	0	5	7	7	8	0	87.5	87.5	100.0	
食品科学科	男	21	3				3	18					5	9		1	15	1	16	2	83.3	93.8	88.9	
	女	18					0	18		1	1		7	4			13	5	18	0	72.2	72.2	100.0	
計		39	3	0	0	0	3	36	0	1	1	0	12	13	0	1	28	6	34	2	77.8	82.4	94.4	
生物生産学科	男	32	6	2		1	9	1	22		2	1	2	5	3	1	5	19	3	22	0	86.4	86.4	100.0
	女	10		1			1	9			1	1	1	1	2		6	3	9	0	66.7	66.7	100.0	
計		42	6	3	0	1	10	1	31	0	2	2	3	6	4	3	5	25	6	31	0	80.6	80.6	100.0
計	男	132	12	7	42	3	64	2	66	0	4	1	3	12	23	1	11	55	9	64	2	83.3	85.9	97.0
	女	46	1	2	8	0	11	1	34	0	1	2	1	8	9	2	2	25	9	34	0	73.5	73.5	100.0
計		178	13	9	50	3	75	3	100	0	5	3	4	20	32	3	13	80	18	98	2	80.0	81.6	98.0
専攻科 船舶運航課程	男	20					0	20		1	1				6	2	4	15	5	20	0	75.0	75.0	100.0
	女	2					0	2			1				1			2	0	2	0	100.0	100.0	100.0
計		22	0	0	0	0	0	22	0	1	2	1	0	7	2	4	17	5	22	0	77.3	77.3	100.0	
専攻科 船舶用機関課程	男	29					0	29	3	2	1	1		4	6	6	23	4	27	2	79.3	85.2	93.1	
	女	0					0	0									0	0	0	0	0.0	0.0	0.0	
計		29	0	0	0	0	0	29	3	2	1	1	0	4	6	6	23	4	27	2	79.3	85.2	93.1	
計	男	49	0	0	0	0	0	49	3	3	2	2	0	10	8	10	38	9	47	2	77.6	80.9	95.9	
	女	2	0	0	0	0	0	2	0	0	1	0	0	1	0	0	2	0	2	0	100.0	100.0	100.0	
計		51	0	0	0	0	0	51	3	3	3	2	0	11	8	10	40	9	49	2	78.4	81.6	96.1	
研 究 科	男	8					0	8					1	1	1		2	5	2	7	1	62.5	71.4	87.5
	女	0					0	0									0	0	0	0	0.0	0.0	0.0	
計		8	0	0	0	0	0	8	0	0	0	1	1	1	0	2	5	2	7	1	62.5	71.4	87.5	
総 合 計	男	189	12	7	42	3	64	2	123	3	7	3	6	13	34	9	23	98	20	118	5	79.7	83.1	95.9
	女	48	1	2	8	0	11	1	36	0	1	3	1	8	10	2	2	27	9	36	0	75.0	75.0	100.0
計		237	13	9	50	3	75	3	159	3	8	6	7	21	44	11	25	125	29	154	5	78.6	81.2	96.9

【就職先の分類】

水産関連分野

- 各種団体：水産に関する団体(漁業、流通、船舶等関係団体)
- 漁業・養殖業：水産動植物の採捕又は養殖の事業者
- 水産加工：水産動植物を原料又は材料として、食料、肥料その他の有用物を生産する事業者
- 水産流通：水産物の貯蔵、運搬、販売等の流通に関する事業者
- 調査開発等：海洋水産関連の調査会社
- 資機材供給等：水産業やそのサービス部門等に資機材供給等を行う関連事業者
- その他：水産業関連分野以外の公務員・団体・企業など

平成25年度卒業生進学・就職状況一覧表

平成26年3月31日現在

<p>◎進学(大学院等)</p> <p>大阪市立大学大学院 九州工業大学大学院 千葉大学大学院 東京海洋大学大学院 長崎大学大学院 奈良先端科学技術大学院大学 広島大学大学院 福井県立大学大学院 北海道大学大学院</p>	<p>民間企業等</p> <p>秋田海陸運送 朝日工業社 味源 アワーズ イイノガストランスポート 茨城ガーリック工業 うおいち 宇部興産海運 雲仙きのこ本舗 オオイズミダイニング オリックス不動産 海洋技術開発 海洋建設 角上魚類 鹿児島船舶 かどや製油 金子産業 かめや釣具 川西倉庫 がんこフードサービス キムキム・ドットコム アクアペット きむら 九州ベストフーズ 九州メディカルシステムズ 共栄マリン 協同商船 協同飼料 共同船舶 極洋 久原本家食品 倉橋島海産 栗林マリタイム ケーイーアイシステム 恒栄商事 神戸発動機 五栄土木 コスモス薬品 サニックス 三幸産業</p>	<p>三徳船舶 下関海陸運送 下関市栽培漁業センター(囃託) ジャパンファーム 商船三井 商船三井テクノトレード ショクリュー 白地水産 新笠戸ドック 鈴廣かまぼこ 成和産業 仙都魚類 ダイイチ 大栄フーズ 大起水産 ダイキンアプライドシステムズ 大水 太平洋フェリー 太陽運輸倉庫 大洋エーアンドエフ 太陽建機レンタル 太洋日本汽船 大冷 タックルベリー チムニー 中央海運 中冷 津軽海峡フェリー 鶴丸海運 東海澱粉 洞海マリンシステムズ 東洋高圧 東洋信号通信社 東洋冷蔵 トライアルカンパニー トラクトジャパン 西島製作所 南都水産 新潟原動機 ニシショウ産業</p>	<p>西日本ニチモウ 二丈海運 ニチモウ 日新興業 ニッスイマリン工業 日鉄住金物流 日鉄住金プラント ニビシ醤油 日本海洋事業 日本食品 日本配合飼料 日本郵船 八馬汽船 春風海運 ハローデイ 阪九フェリー 広島ヤンマー商事 福岡倉庫 フランソア 前水産 マックスバリュ九州 マルキン食品 宮崎県農協果汁 武蔵野 名門大洋フェリー 山口テレコム 山松水産 ヤマリア ヤンマーエネルギーシステム 横浜冷凍 ヨンキュウ ランテック リンネット 鷺北漁業部 家業(養殖業)</p>
<p>◎就職</p> <p>官公庁</p> <p>水産庁(船舶) 京都府(船舶) 埼玉県警察 佐賀県 佐賀県(船舶) 島根県 東京消防庁 徳島県(船舶) 山口県 山口県警察 長崎市 浜松市</p>	<p>各種団体</p> <p>(独)水産総合研究センター (公社)北海道栽培漁業振興公社 三重県漁業協同組合連合会 (一財)新日本検定協会 (一社)日本海事検定協会 (国大)北海道大学(船舶) (公大)山口県立大学</p>	<p>五十音順</p>	

平成26年度入試状況

本校の平成26年度入試状況をお知らせします。
推薦・一般入試の志願者総数は1061名でした。
昨年11月に実施された推薦入試には、全学科で202名の応募があり、また、今年2月に実施された一般入試には全学科で859名の応募がありました。
一般入試の学科別応募状況は、水産流通経営学科40名(募集人員12名に対する倍率3.3倍)、海洋生産管理学科158名(募集人員23名に対する倍率6.9倍)、海洋機械工学科113名(募集人員24名に対する倍率4.9倍)、食品科学科207名(募集人員27名に対する倍率7.7倍)、生物生産学科341名(募集人員18名に対する倍率18.9倍)でした。

一般入試の過去6年間の志願者数の推移は、20年度453名、21年度567名、22年度653名、23年度675名、24年度665名、25年度840名でした。平成26年度一般入試志願者数の対前年度比は102.3%であり平成18年度以降の最高値となりました。推薦入試では推薦入試制度導入以来最多の志願者数でした。また、推薦・一般入試の志願者総数1061名は、独法移行後最大の値でありました。これは、高校訪問、進学ガイダンスやインターネットを用いた情報提供など広報活動の強化を行った結果であると推察しています。今後も広報のあり方、入試制度の見直しなど、社会のニーズに沿って、本校の特色と個性豊かな教育方針を全面に打ち出し、魅力ある大学校となるよう一層努力する所存です。



水学園だより

独立行政法人 水産大学校 〒759-6595 下関市永田本町2丁目7-1 電話083(286)5111
ホームページ <http://www.fish-u.ac.jp> [発行] 学生課

平成27年にあたって

理事長 鷲尾圭司



今年も大河ドラマで幕末の長州が話題になっています。江戸時代の太平の世を覆す大変革（明治維新）に下関が大きく関与したことは誰もが認めることです。その原動力は関門海峡を通る北前船など商業流通が落とした経済力であったことも知られています。では、徳川幕府はそんな価値

のある関門海峡を外様の毛利家に与えてきたのはなぜでしょうか？

歴史書にもあまり触れられていないのですが、家康の時代には関門海峡は交易船の通航に価値がなかったのではないのでしょうか。急流で暗礁が多く、価値のある品を通すリスクを考えると、萩往還など陸路をたどるのが主だったのではないのでしょうか。その時の経済価値だけで物事を評価すると、先を誤る見本のように思えます。

種明かしを試みれば、戦国時代に軍事用に使われてきた火薬が平和な時代になって余るようになり、航路の障害物を爆破して通航を容易にする工事に用いられるようになったのではないのでしょうか。関門海峡にもそうした知恵者がいたのでしょう、その結果、江戸時代の中期になって北前船の西廻り航路が完成するようになったのです。戦国時代を制した家康には見えなかった変化かも知れませんね。

さて、水産大学校は来年4月から「国立研究開発法人 水産研究・教育機構」という組織の人材育成部門になります。研究開発部門をになう水産総合研究センターと一体になるわけですが、下関の地で水産人の育成をはかることは今後も変わりません。大きな研究機関と歩みを共にするわけですから、これまで以上に水産に関する情報も研修や実習を行う機会も充実していくことが期待されます。

しかし昨今では、3年先、5年先の成果を求めて事業が組まれていきます。そして評価され、選択と集中で効率の悪いとされる試みは却下されていきます。残念ながら百年の計はおろか、十年先も見通せない時代に入っているようです。そこで将来の水産界の行方を見定めつつ、効果的な教育を進める必要があります。

農林水産業といった自然と付き合う第一次産業には百年の計が必要です。今の時代には似合わなくても、将来の世代のために準備する意義は大きいものがあります。東京など大都市への集中ばかりではなく、地方の自然との関係性を重視した暮らしは地方創生として位置づけられます。これからは本校が地方にあることの特長を活かして存在感を示していきたいと思えます。

昨年クリアしたJABEE認定（技術士教育）では、新たにエンジニアリング・デザイン力の教育が強く求められてきました。本校がこれから取り組む「水産におけるエンジニア・デザイン力の教育」は、個々の専門性ばかりではなく、分野を超えた協力態勢で、問題解決を図るプランづくりと実践です。この作業には教職員ばかりでなく、卒業したOBや現場の業界、そして何よりも学生諸君の参画が必要になります。

課題としては、魚食の普及をはじめ、船舶運航の安全やエネルギー環境対策、未利用資源の活用、漁村など地域暮らしの知恵など、海とつながる社会全般に及びます。専門性も研ぎ澄ましつつ、視野を広げて総合的な判断力を養い、現場の幸せを紡ぎ出す苦勞に喜びを覚えられる人材が目標になります。それは当然1人ではできませんので、仲間と協力するチームワークが必要ですし、折り合いの付け方を学ばなければなりません。

このように先を見据えつつ、水産大学校が農林水産省所管で、ユニークな人材育成で特徴づけられるよう努力して参ります。それが元気の悪いと言われる水産界を活気づけ、わが国の、そして世界の水産界に可能性を広げられるよう皆さんと協力して参りたいと思えます。本年もどうぞよろしくお願ひいたします。

最近の話題

平成26年度「水産経済・流通調査」 実習について

水産流通経営学科 准教授 大谷 誠

本実習は、水産流通経営学科の3年生に対して、水産業や漁村の実態を把握し、現状の問題点や今後の課題を考える力を養成することを目的として行っています。とくに、学生自らが、水産業の労働や漁村の生活を経験することで、日頃の授業で習得につ



網上げ作業の様子



鮮度保持作業の様子

とめている論理と実態との整合性を確認することを重視しています。

本年度は、9月29日から10月1日に長崎県五島列島の久賀島にある蕨町で実施しました。当地域は、長崎市からジェットホイールで福江島に渡り、さらに海上タクシーで移動する必要のある、いわゆる二次離島に該当します。当地域を実習地とした理由は、第一にここで定置網を営むマルセイ水産の片山社長が協力を申し出てくださったことです。20名以上の学生を漁船に乗せ、漁業体験させることは大きな負担を伴うため、協力していただける漁業者の方は大変ありがたい存在です。第二に、住民数が数十人で商店や医療機関が存在しない純漁村であることです。吉見周辺を山と海しかないと言う学生に、純漁村部の生活環境を理解してもらう必要があると考えたためです。

さて、具体的な実習内容ですが、まず定置網漁船に乗り、乗組員と共に網上げ作業を行いました。乗組員に叱咤激励されて、よろめきながらも頑張って網上げする者、腰が痛いと言ってギブアップする者、船酔いのため網上げどころではない者、各々の学生がはじめての漁業操業を経験しました。そして、定置網でとれた魚を使って、脳殺→血抜き→神経抜きといった鮮度保持の作業を行いました。学生達は暴れる魚と格闘し、自身の指を血抜きする学生もいました。さらに、この魚を地域の方々と学生で調理し、夕食を共にしながら親睦を深めました。その他に、クロマグロ養殖場の餌やりやクルマエビ養殖場の皮むきを体験したり、地域の漁業者の方々と将来の漁業について意見交換をしたりしました。

また、純漁村部の生活も経験しました。当地域は、商店が存在しないため、地域のおばあさんと学生で日々の食事を作りました。民宿もないので、廃校になった学校の校舎で寝泊まりし、お風呂は漁家の方々に貸してもらいに行きました。また、公共交通機関がないので、漁家の方に漁船や車を出してもらって移動しました。街灯がない漁村では、懐中電灯がないと夜に歩けないことも知りました。

日頃の授業で学生にレポート課題を与えると、とても上手に書いてきます。しかし、どこか表面的外

面的で、血の通っていない他人事のように書くことが気になっていました。実習の帰路、学生達が「久賀島を元気にしたいね」と話していました。その発言にはこれまでにない実感がこもっているな、私にはそう感じられました。

山口県沿岸漁業のLED集魚灯の開発

海洋生産管理学科 講師 梶川和武

集魚灯漁業の歴史は古く、日本最古の和歌集である万葉集の和歌にも沿岸で操業する漁船の漁火が登場しています。当時の漁火は、松明、篝火でしたが、近年、より強い光を求めて、大光量の光が使用されるようになりました。その結果、光を遠くまで照射して、広い範囲の魚介類の集魚が可能になりましたが、発電機の大形化が進み、燃油消費量の増加を招きました。昨今、燃油高騰化、魚価の低迷により、漁業経営が厳しさを増す中で、灯具の省エネ化が切望されています。昨年10月にノーベル物理学賞を受賞し、世間の注目を集めたLEDは、一般の照明器具では高い省エネ性から広く普及し始めています。集魚灯漁業の現場においても、その省エネ性に大きな期待が寄せられています。しかし、既存灯に比べて十分な集魚ができない場合があり、まだ実用段階にありません。そこで、平成21~25年の間、文科省地域イノベーション戦略支援プログラム事業に参画して、山口県の基幹漁業であり、かつ集魚灯漁業の一つであるカタクチイワシ棒受網漁業で使用する灯具のLED化に取り組んできました。私達は、本事業の中でカタクチイワシの網膜の電気生理実験や網膜切片の観察や水槽実験による対光行動の観察により、カタクチイワシが最も反応する光を突き止めました。さらに、これらの結果を反映したLED灯を用いた洋上実験で、消費電力が既存灯の1/10のLED灯であっても、既存灯と遜色なく漁獲できることを明らかにしました。また、音響機器によって集魚灯回りに分布する魚群を計測した結果、試作したLED灯は、LEDの指向性をうまく活用して、網の届く範囲に効率よく集魚できていることが分かりました。

平成26年3月で事業が終了し、一段落しましたので、平成26年9月19日に、九州大学で開催された日本水産学会の第64回漁業懇話会講演会にて「沿岸漁業へのLED灯の実用化と課題」と題したシンポジウムを開催しました。当日は、80名近くの来場者を迎えることができ、改めて、LEDに対





する関心、期待の高さを実感し、大盛況の中に終えることができました。

現在は、山口県水研センター外海研究部と連携しながら、これまで実験に協力して頂いた漁業者に、LED灯を実際の操業で使用してもらい、漁獲効果の検証を行っています。今のところ、いい成果が出ており、他の漁業者からは是非使ってみたいとの問い合わせを受ける状況までになりました。来年度は、複数の漁業者にLED灯を使ってもらおう準備を進めています。近い将来、山口県の沿岸で操業する漁船の漁火はLEDになる手応えを感じています。私達は、集魚灯のLED化によって漁業経営が少しでもいい方向に向かい、活気のある明るい浜を早く取り戻してもらいたいと思っています。

練習船を活用した教育・研究活動

海洋機械工学科 教授 学科長 前田 和 幸

水産大学校は耕洋丸（総トン数2,352 tons）、天鷹丸（総トン数716 tons）といふ2隻の練習船を保有しており、海洋機械工学科ではこの練習船を活用した教育と研究を行っています。この研究成果は国内外において高い評価を受け、これまでに（社）船用機関学会（当時の名称）から耕洋丸を用いた研究（論文）に対し用して「奨励賞」、天鷹丸を用いた研究（論文）に対し用して「論文賞」を受賞しています。また、近年水産大学校における海技士教育の評価が高まり、昨年度専攻科卒の就職先は水産関係だけでも水産庁3名、水産総合研究センター1名、共同船舶2名、大洋エーアンドエフ1名、北海道大学1名に加え県の調査取締船にも数名が就職しております。

我が国は四方を海に囲まれ、水産業と海運なくしては成り立ちません。しかし、近年船舶から排出される大気汚染物質の国際的な規制が強化されつつあります。先に記載しました2件の学会賞は「船舶から排出されるNO_x（窒素酸化物）の低減」に関する研究ですが、現在もこの研究を継続するとともに近年、注目を集めるようになった「PM（粒子状物質）」に関する研究も、2隻の練習船及び航海訓練所の練習船を用いて約15年間実施しております。このような実績が評価されて、現在（公社）日本マリンエンジニアリング学会に設置された「船用機関の排気エミッション低減に関する研究委員会」の委員長と同学会の理事を務めています。

このような状況の中、IMO（国際海事機関）において「2016年以降に建造される船舶から排出されるNO_xを、2000年から実施されている規制値から80%低減」という規制案が可決され、実施されることになりました。通常、2～3割の低減であればエンジン本体における専門技術を用いて何とかできるのですが、8割という数字は重く、エンジンメーカーをはじめとする各組織において異種分野との共同研究という形でこれを解決すべく懸命な努力が続けられています。水産大学校では旭化成ケミカルズ（株）との共同研究により、「酸素分子と水分子を優先的に透過させる特殊な膜：Oxygen Reduction and Humidification Membrane」を用いる方法によりこれを解決すべく研究を進め、その成果を、(1) 国内の講演会及び海外で開催される国際会議において発表、(2) 学会誌に論文・技術資料として掲載という形で広く公表してきました。その論文（共著）が、昨年5月に開催された“（公社）日本マリンエンジニアリング学会総会”において「ロイドレジスターマンソン賞（英文論文賞）」を受賞しました。また、同時に学会活動に特に貢献したとして「功労賞」（個人）を受賞しました。これは、学会に設置された専門委員会の委員長としての活動実績と、国内で唯一、練習船を保有する機械系学科としての特色を活かした個人の研究業績が評価された結果と考えます。

海洋機械工学科は、2隻の練習船を活用した教育と研究を行っている全国唯一の機械系学科です。これからも、この特色を最大限に活かして、水産業に貢献する人材の育成に努めます。



練習船 耕洋丸

日本農芸化学会中四国支部 第41回講演会の開催

食品科学科 講師 臼井 将 勝

平成27年1月24日に本校講義棟にて、日本農芸化学会中四国支部第41回講演会が開催されました。同学会は、農芸化学分野の基礎及び応用研究の進歩を図り、それを通じて科学・技術・文化の発展に寄与することにより、人類の福祉の向上に資することを目的として設立された学術団体です。学会構成員は全国の農林水産系学部と研究機関および関連企業が中心で、その数は10,867名となっています。同中四国支部は、中四国9県で構成され、約900名の会員が所属しています。年に2回開催される講演会は支部大会に次ぐ主要行事で、学生の学会デビューや訓練の場となっており、非常に教育効果の高い行

事であると共に中四国地方の農芸化学研究者の重要な交流の場となっています。

この度の第41回講演会は、原田和樹食品科学科長を世話人として食品科学科教員で農芸化学会会員の8名が実行委員を担当し、鷲尾圭司理事長並びに濱野明校長にも絶大なご協力を頂きながら開催しました。学内外から183名が参加して、受賞講演1件、ミニシンポジウム4件、一般講演74件の発表がありました。特筆すべきは一般講演の講演件数で、74件は同支部講演会での最高件数を更新し、例年の支部年度大会を超える規模でありました。(一部では懇親会場の春帆楼とトラフグの誘引力という意見もありましたが、本校や学会の研究アクティビティとの相乗効果であると信じています。)そのため、7つの会場を設け、約30人の食品科学科4年生に受付と会場係を手伝ってもらいながらの運営となりました。この他にも本校学生の参加者が多数あり、中でも12名の発表者は、国内の一流研究者とのディスカッションを通じて通常のカリキュラムでは経験できない緊張感、達成感そして知識を得られたことは何ものにも代え難い財産となったと思われます。

近年問題視される学生の内向き傾向対策のつもりで開催を引き受け、より多くの学生に他大学、他学部、他研究室に触れることで視野を広げてもらいたいと望みながら講演会の準備・運営に励んできました。その結果として、講演会終了時に他大学の先生方からの質問事項に頭を悩ませ、他大学の研究者や学生の講演に感銘を受けた本校学生の姿を見ることができ、教育者と研究者の両面を併せ持つ大学教員ならではの喜びを感じることができました。今後も学内に新鮮な風を呼び込みながら教育研究活動に励んでいきたいと考えています。最後に講演会開催に多大なご協力とご支援をして頂いた水産大学校後援会および下関観光コンベンション協会に厚く御礼申し上げます。



練習船耕洋丸によるカンボジア海域 SEAFDEC 共同調査に参加して

生物生産学科 特命教授 上野 俊士郎

昨年11月21日～30日までの10日間、F科・M科4年生の遠洋航海実習中の耕洋丸にカンボジアとタイの調査員と共に乗船し、初めてカンボジア海域で海洋観測及び漁業調査を行った。SEAFDEC(東南アジア漁業開発センター)は、ASEAN(東南アジア諸国連合)10ヵ国と日本による東南アジア地域の漁業開発促進を目的とした地域的国際協力機関で、本校は2005年より2隻の練習船による9回の共同海洋漁場調査を実施し、今回が記念すべき10回目である。

11月10日午前、私はバンコク・メナム川河口のSEAFDEC 棧橋に接岸中の耕洋丸に乗船した。10月26日下関を出港した耕洋丸は、13日間の無寄港洋上実習を経て寄港中で、学生はバンコク市内の水産施設などを見学し、皆元気な様子であった。当日は日射しが強く、午前の早い時刻でも気温は30℃前後、まさに下関から真夏に飛び込んだ感じで、私には耕洋丸の白い船体が眩しくまた日焼けした乗船学生が遅しく感じられた。午前中SEAFDEC 講堂で、浜野明校長、耕洋丸乗船実習中の学生全員及び船長他乗組員、またSEAFDECの理事長と関係者及びASEAN諸国からの研修生など総計200名余が出席して、来年度からの共同調査の調印式が行われた。

11月15日耕洋丸はカンボジアに初入港した。接岸したシアヌークビルの棧橋付近は、タイ滞在中のメナウ川の茶色い濁りと違い、岸近くでも清澄な海が広がっていた。19日までにタイSEAFDEC2名とカンボジア4名の調査員が乗船し、調査員の顔ぶれが揃った(写真1)。

11月20日午後2時、シアヌークビルを出航し、いよいよ調査開始だ。調査は隣接するタイ・ベトナムと主権主張の重複域を除いたカンボジア沖海域(写真2)に配置した23点で、7日間の午前と午後の各1調査点でCDT海洋観測、ノルパックネットでのプランクトン採集、日没後稚魚ネットの海面水平曳き、また調査点間の移動中には計量魚探による魚群分布のモニタリング、ADCPによる海水の流れの計測及びクラゲを含めた海面浮遊物の目視観測などを行った。また、28日～30日は着底トロール網による魚類採集を沖合から沿岸の3地点で午前と午後の各1回、計6回行った。

調査データについては現在解析中だが、特に気づいた点を以下に述べる。まず、沿岸近くの表層水温は29℃前後と高く塩分は29-30psuと低く、表層に河川起源と思われる高水温低塩分水が多量に分布し、しかもその表層水は透明度が10m以上と極めて清澄であった。海底は平坦で、トロールのオッターボードが食い込む程に厚い軟泥と粘土が分布していた。底曳きトロールの漁獲物(写真3)は、わが国南部海域のものと類似したが、漁獲量は極めて少なかつ

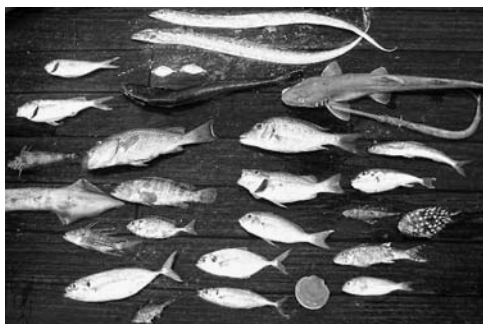
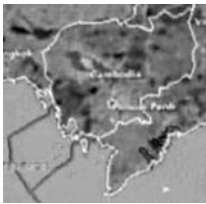
た。

カンボジア海域の水産業振興を目的とした漁場開発には、今後共同調査を継続しち密なデータ解析を経て話すべきだが、漁法の開発、海域特性を考慮しての海底・浮き漁礁の設置、及びカンボジア国民の海産物への関心の増大が必要と感じた。そのためには、カンボジアは20世紀後半の内戦で国が疲弊していること、また海からの漁獲生産が内水面の数分の一と低いことなどを考慮した今後長期の国際協力を行なう必要があるだろう。



↑写真1：シアヌークビル出航直後の調査員たち、右から二人目が筆者、四人目と五人目がタイ SEAFDEC 及び他の三名はカンボジア政府機関からの調査員

写真2：カンボジア国土と調査海域(左下の枠内) ↓



↑写真3：底層トロ
ル漁獲物の一例

新任のご挨拶

天鷹丸二等機関士 片山 晃也

平成26年4月の人事異動で独立行政法人水産総合研究センター東北区水産総合研究所若鷹丸より独

立行政法人水産大学校天鷹丸二等機関士としてへ赴任致しました片山晃也と申します。



下関の街へ足を踏み入れるのも学生以来5年ぶり、変化する街の環境への少しの戸惑いと何か懐かしさを感じる風景に新しい生活への期待感を感じております。

学生時代お世話になった船に今度は乗組員として乗船することとなり当初複雑な気持ちでしたが、学生の頃の記憶を思い出しつつ、本船乗組員の方々へ支えて頂きながら日々勤務に従事出来ことをまず深く感謝申し上げます。

本船は練習船であり学生の実習が主体となるため、当直中の学生への教育や学生の予定を考慮しつつ、担当機器の整備作業の予定を組まなければならない為、状況の変化に応じて今まで以上に緊張して業務を実施しております。

パラオ・フィリピンといった学生以来の遠洋航海ではマグロはえ縄操業、海賊対策当直、台風避難等もありましたが、乗組員の方々のご活躍のもと無事乗り越える事が出来、ようやく二か月間の長い遠洋航海も終えて下関に無事戻って来られたことにも深く感謝申し上げます。

また遠洋航海も終わり一息ついている頃に今年度ドック作業予定計画があり、本船も老朽化対策及び代船に関しての計画も少しずつ検討が始まっている為、より良い計画を進めていけるよう日々努力しております。

最後に私の第二の故郷である下関に再度来られたのも何かのご縁ということもあり、水産大学校教員の方々、乗組員の方々、乗船してくる学生、下関という街それぞれと良い関係を築くことの出来る良い機会を頂けたことに感謝したいと思います。

今後とも皆様のお力添えのもと水産大学校のお役に立てられるよう努力していきたいと思っておりますので、今後ともご協力のほどよろしくお願い致します。

就 職 活 動

就職活動を終えて

水産流通経営学科4年 大窟 貴信

私の就職活動は、3年生の夏から、第一志望に内定した4年生の冬まで、一年半に及ぶ長い長いものだった。その間、私はひたすら自分を見つめなおし、得たもの・得るべきものを考えてきた。いくつかの企業の採用担当者や水大OBを何度も訪問した。就職を考慮して、卒論のテーマも途上国水産業・水産教育支援について設定し、その調査のためマイクロネシアまで行った。もちろん壁は大きかったが、やりたいこと、やるべきことだから、やり遂げられた。

私が就職活動で得た最大のことは、人との繋がりが。企業から選考に落ちた旨の連絡を受けても、黙って傍にいてくれる友達、次に必要な助言を下さる先生方、そして何より、私以上に心配し、ずっと支え

てくれた家族には、感謝してもしきれない。今後は、身を以て多くを経験し、それを活かすことで世界の水産業・経済の発展に寄与したい。

これから就職活動に挑む皆さんは、どうか自分で作った常識やモラルに囚われないでほしい。行きたい企業があれば、何度でも電話し、何度でも足を運んでもらいたい。臆することなく行ってみれば、意外に何とかなるものだ。そして、企業や自分の良いところ、悪いところがおのずと見えてくる。就活を終えた頃には、以前より何倍も成長した自分に驚くのではないだろうか。

就職活動を終えて

海洋生産管理学科4年 野 副 晃

私は今年度、福岡県(水産)に内定を頂きました。もともと大学院への進学後、公務員試験の受験を希

望しておりましたが、父の病状と相談しつつ、大学4年時に公務員試験を受けることを決意いたしました。そのため、公務員試験の教養科目の勉強を開始したのは4年生になってからのことでした。あまりにも遅いスタートであったため、私の事を想い、反対してくださる方もおられましたが、指導を担当していただいた毛利先生、大学の先生方、家族、友人の激励に励まされ、自分の中では高い目標に向かって猛進することができました。結果として努力が報われるものとなり、試験という高い壁を乗り越えることができました。

高い壁ほど登ったときの達成感を一入味わうことができます。水産大学校の後輩にも、目標を高く設定し、同じ達成感を味わってほしいと思っております。勉強を開始する時期に遅いということはありません。もう遅いと考える時間を、有意義なものに変えるべきです。是非、自分の決めた道を疑わず、努力を続けてほしいと願っております。毛利先生、海洋生産管理学科の先生方、友人、親には感謝の気持ちでいっぱいです。水産大学校の卒業生という名に恥じぬよう、日々精進していきたいと思っております。

就職活動を振り返って

海洋機械工学科4年 桑原 卓也

私は3年の1月初旬まで進路に悩んでいて就職活動を開始したのは冬休みが終わってからでした。すでに採用活動が解禁してから1ヶ月以上経過しており、業種研究や自己分析もしていなかった私は非常に焦っていました。何をやるにも時間が足りず、対策もせずに挑んだ初めての面接では、緊張のあまり面接中の部屋のドアを間違えて開けてしまい、その他にもミスが重なるなど、恥ずかしい思いをしてしまいました。そのため最初の面接の後、焦っていた自分を反省して肩から力を抜き、面接練習と自己分析に重点を置くように心がけるようにし、それからの面接試験では面接官の方と対面しても落ち着けるようになり、無事第一志望の企業に内定をいただくことができました。

就職活動の開始が遅かった私が、活動をするうえで重要だと感じたのは自己分析です。自己分析がしっかりできていると、エントリーシートを早く完成することが可能であり、選考までの時間を企業研究や面接の対策に回せるからです。最後に、自己分析や自己PRのネタで悩んでいる人は、他大学には無い水産大学校での実習や生活環境での経験を思い出してください、きっと面接官や企業の方が食いつくネタを水大生は皆持っているはずですよ。何があっても諦めず、頑張ってください！

私の就職活動

食品科学科4年 竹内 麻衣

私の就職活動は、振り返ると「楽しかった」の一言に尽きると思います。食べることが大好きな私は食品業界に焦点を絞って就職活動を始めました。先輩から「自己分析」をすることが大事であるとアド

バイスを受け、時間をかけてしっかり行いました。当初は皆さんと同様に不安でいっぱいでしたが、先生方や友人たちに相談することで自分が何をすべきなのかを見出すことができ、不安から自信へと変えていけました。説明会に行くとなんか新たな友人もでき、今までなかった視点を取り入れることができ、自分への刺激となりました。遠方に行く時には、志望企業の商品やその土地の美味しいものを食べることを楽しみにしていたためストレスを感じることもなく赴くことができました。苦手意識があった面接も、接客のアルバイト経験と重ねることで緊張することもなく面接官の方と楽しくお話をすることができました。

これから就活に臨む皆さんも、忙しく落ち込むことも多い就職活動ですが、その中にも楽しさを見つけてください。視点を切り換えることによって好転することもありますので、明るさや元気を忘れることのない様に、そして何より周りの方々のアドバイスを大切に内定を勝ち取ってください。

私の就職活動

生物生産学科4年 小岩 愛理

私は今年度、山口県庁水産課から内定をいただきました。私は3年生の4月に水産試験場で働きたいと思うようになったことがきっかけで公務員の試験勉強を始めました。しかし、気の遠くなるような試験科目の多さに勉強は思うように進みませんでした。12月、友人達が一斉に一般企業の就職活動を始めると、私は公務員一本に絞ることへの不安から、公務員の夢を諦め一般企業の就職活動を始めました。一般企業の内定者が始まった4年生の5月上旬、就職活動をする中で「やっぱり公務員になりたい」という気持ちが一層強くなり、それからは一般企業の就職活動をきっぱり止め、公務員の試験勉強に専念しました。試験までの約1ヶ月間、私は何度も焦りや不安が襲う中、必死に勉強しました。

私が最後まで強い気持ちを持って試験に臨むことができたのは、私を支えてくれた先生・先輩・友人・家族の存在と数々の実習、部活動、ボランティア活動の経験が大きかったと思います。春からは学ぶ姿勢を忘れず、水大で得た知識や技術を生かして水産業の発展に貢献したいです。皆さんも大学生活で経験する様々な出来事や人との出会いを大切に、夢や目標に向かって頑張ってください。

就職活動を振り返って

水産学研究科 加藤 めい子

就職活動を振り返ると、決して順風満帆といえるものではありませんでした。私は研究科入学当初から、海洋環境の保全に関わる仕事がしたいという思いを抱いており、研究を進めるにつれ環境調査会社への就職を強く希望するようになりました。しかし、実際に就職活動を始めてみると門戸は狭く、思うようにはいかず悩むこともありました。

模索する日々を過ごすなかで、先生方、家族、友人の助言から私が得たものがあります。それは誠実

であること、そして自分を見失わないことです。様々な関門を前にし、多くの学生がともしれば自分を見失いマニュアルに陥りがちです。マナーや礼儀作法、常識は当然必要ですが、それ以上に「この人と働いてみたい」と思わせるような魅力が相手に伝わらなければ意味がありません。要は自分を売り込むことです。このことに気づいたとき、私は就職活動を楽

しめるようになったのです。その結果、志望していた分野の会社に内定を頂くことができました。

就職活動は、多くの学生にとって社会との直接的な対面を求められる初めての現場です。一方で自身と深く向き合う好機でもあります。このチャンスを逃さず、ぜひ自分自身をしっかりと吟味してください。

大 学 祭

海燕祭を終えて

2014年度学園祭実行委員長 海洋生産管理学科3年
宮崎 脩平

年に一度の水産大学校のイベントである海燕祭は長い歴史があり、学校と地域の方々との交流を大切にしてきました。私たち実行委員会は今までの伝統を絶やさずに、さらに盛り上がる海燕祭を作り上げようと一致団結し、無事に昨年10月11、12日の日程で海燕祭を開催することが出来ました。

今年のカン祭テーマは「海を愛し、海を拓け～そうだ水大に行こう～」というテーマにしました。このテーマは、私たちが愛する海を活用し、大学祭を盛り上げようという思いが込められています。

2014年度カンの祭の開催に向け私達学園祭実行委員会の活動は4月の新入生の勧誘に始まり、山口県

を代表する馬関祭りなど地域のボランティア活動にも積極的に参加してきました。

カンの祭開催当日は台風の影響もありましたが、各企画とも大変盛り上がったと思います。一番人気のある名物の宝探しは今年度も大変好評であり、大人から子供まで楽しんで頂けたと思います。また、無料配布のフグ鍋は先輩方から受け継いだ味付けで、とても美味しいと言って頂きました。100杯分を用意した鍋は1時間を経たないうちに空になり、心を込めて作った私たちも大変嬉しく思いました。その他にも研究室公開や各種講演会も好評で、充実したイベントとなったと思います。

カンの祭の開催に伴い、本校の先生方、地域の方々など多くの皆様からご理解とご協力を頂き心から感謝するとともに、これからの学生生活を将来の夢に向かって有意義に過ごしたいと思います。

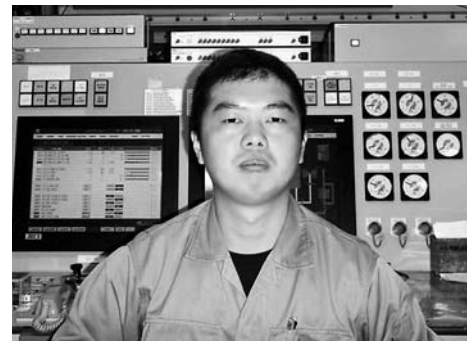
学生部だより ～各界で活躍する卒業生～

開洋丸での経験と練習船への思い

水産大学校 漁業練習船「耕洋丸」三等機関士
海洋機械工学科59期卒(専攻科船用機関課程修了)
榎 良祐

水産大学校船用機関課程を平成21年3月に卒業し、水産庁に入庁して5年目になります。私の地元は下関で中学校は吉見中に通っていたので、水大はごく身近な存在でした。また父親は市営渡船の機関長をしており、小さいときから船に関わりがあり、将来は船乗りになりたいという夢があったので水大に入学致しました。水大の学生時代は、本当に充実した学生生活を送ることができました。大学4年生や専攻科の時には、遠洋航海に出て船の楽しさや厳しさを学び、さらにはタイやミクロネシア連邦など沢山の国を訪れる機会もあり、普通の大学に通ってれば、なかなか体験出来ないような経験をすることができ、人としてすごく成長する事が出来たと思います。水大で過ごしている中で、調査船・取締船に興味を持ち、それらの船を所有している水産庁の船舶職員の募集が運良くあり、入庁することが出来ました。水産庁入庁後、水産庁のフラッグシップである漁業調査船「開洋丸」に配属されました。開洋丸に乗船中の機関長は水大の卒業生で、他の水産庁や水産総合研究センター所属の船舶にも、多くの卒業生が活躍しています。開洋丸では、現在絶滅危惧種に指定されているニホンウナギの生態調査や産卵

場所調査、ペルー沖でアメリカオアカイカの調査等、最先端の研究に携わることができました。特に完全養殖



に成功したニホンウナギの稚魚の餌に関する調査は、とても興味深いものが有りました。開洋丸に4年間乗船後、練習船「耕洋丸」に配属されました。耕洋丸では通常の機関当直はもちろんですが、学生指導・教育がメインです。私の担当機器は冷凍機関係、電気関係、燃料関係ですので、それらについて学生教育するのが私の役割であります。その学生教育に生きてくるのが開洋丸での4年間の経験です。開洋丸では、恥ずかしながら、いろんな失敗をしまし、様々なトラブルも経験しました。しかし当時の機関長や上司の指導の元、その失敗やトラブルを乗り越えてきました。また予備品の管理や後任への引継ぎの重要性など、基本的な事ですが機関士としてはすごく大事な事を指導して頂きました。私は就職して初めて、学生時代にもっと興味を持ち学習すべきだったということを感じましたが、今の学生も言われた事をただやるだけで、自主的に機器

の構造を調べてみようという積極性がなかなか見受けられません。機関当直を何も考えずに言われた事だけやって過ごし、当直以外でも課題があればただ何となくやり、それが終わればおしゃべりして寝るだけ。それでは一日一日を無駄に過ごしているような気がしますし成長はしません。私も就職1年目から苦労した経験をふまえて、今の学生には疑問を投げかけて興味を持たせ、より実戦的な実習を経験させて、学生の意識改革が出来るよう指導に当たりたいと思います。

コイ産業の発展を願って

生物生産学科 助教

生物生産学科2期(増殖52期生)卒

安本 信哉

私は生物生産学科2期生(増殖52期生)の安本信哉です。現在は母校である水産大学校生物生産学科の助教として、魚介類の疾病に関する研究を行うとともに、後輩の指導に勤めております。この度は“第一線で活躍する卒業生”として掲載させていただくことになりました。目立った活躍こそございませんが、私なりにつづけてまいりました業界での活動についてお話したいと思います。

大学の講義で魚介類の病気に興味を持ったため、卒論研究室も魚病の研究室を選び、三重大学院大学の魚病の研究室に進学しました。三重大学進学時には大学院で学んだ知識や技術を活かした職業に就ければよいと、漠然と思っていました。しかし、大学院在学中にコイヘルペスウイルス病という病気の発生によって、次々とコイ生産者が廃業していくのを目の当たりにし、あらためて魚病対策の重要性を認識するとともに、魚病を通じて水産業に貢献したいと強く感じました。そして、大学院修了と同時に日本動物薬品株式会社という観賞魚の薬品メーカーに就職しました。就職後は魚類だけでなく、犬や猫などの愛玩動物の薬品や飼料の開発にも携わっていました。そのなかでも、錦鯉の薬品開発や診断・治療法の普及活動に力を注ぎ、学会などにも積極的に参加していました。そして、それまでのコイヘルペスウイルスに関する研究や国内外での魚病対策の普及活動が認められ、運よく水産大学校の教員となりました。水産大学校の教員になってからも、日本動物薬品と共同で錦鯉関連の活動をつづけております。本年度は全インドネシア錦鯉品評会(ジャカルタ)で魚病講習会を行い、全日本総合錦鯉品評会(東



全インドネシア錦鯉品評会での講習会

京)でも魚病勉強会を開催します。また、様々な養殖対象種に関する疾病対策の研究にもとり組み、養殖現場での魚病指導や診断治療なども行っております。これからも、これらの研究・活動を通して業界に貢献するとともに、実学教育を通じてより一層活躍できる水産人を育成したいと考えております。

念願の海外勤務

ニッスイマリン工業株式会社

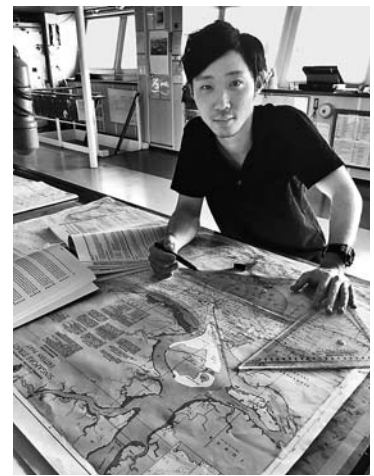
海洋生産管理学科63期卒

(専攻科船舶運航課程修了)

平原 達矢

私は平成26年3月に専攻科船舶運航課程を修了し、4月からニッスイマリン工業(株)に就職しました。入社以降、瞬く間に9か月が過ぎ、現在は、浚渫船に乗って、操船や甲板作業などのフィールドワークから出入港や浚渫作業に関わる書類の作成などのディスクワークまで幅広い仕事に従事しています。通常は1日に4時間の当直を2回の計8時間ですが、現在は特殊な作業に従事しておりますので、最長12時間の当直を行っています。今、作業している現場はマレーシアですが、浚渫工事があれば、世界中どこにでも行きます。水産大学校での講義や実習で学んだ知識は、仕事の現場において大いに役に立っています。また、4年生や専攻科の時に体験した遠洋航海において、日本以外における出入港を体験していたので、海外での作業が多い私にとって、比較的スムーズに仕事に着手できたと思っています。とはいえ、仕事の現場で、実際に作業を経験することで学ぶことは多々あり、まだまだ、知らないこと、分からないことが多くあることを痛感しているのも事実です。早く一人前になれるように、職場の先輩方から助言を受けながら、日々勉強しているところです。また、私が乗っている船にはフィリピン、インドネシアなどの外国人クルーが多く乗船しています。仕事柄、彼ら外国人クルーとも積極的に意志の疎通を図る必要があるため、語学の勉強にも力を入れています。大変なこともあります。今の仕事に対してとても遣り甲斐を感じており、お陰様で楽しく仕事をさせていただいております。

私は、水産大学校入学当初から、海外で働きたいと考えていました。在学中、すべてが順調であった訳ではなく、なかなか思い通りには行かないこともありましたが、志があれば、必ず目標に届くと思います。是非、在校している後輩の皆さんにも、将来の目標をしっかりと持って頂き、それに向かって頑張ってもらえればと思います。





水学園だより

独立行政法人 水産大学校 〒759-6595 下関市永田本町2丁目7-1 電話083(286)5111
ホームページ <http://www.fish-u.ac.jp> [発行] 学生課

ご挨拶

校長 酒井 治 己



水産大学校教職員および保護者の皆様、並びに関係各位におかれましては、平素から本校の教育・研究にご支援いただき、誠に有難うございます。創立74年の歴史と伝統を誇る水産大学校の校長として本年4月1日から重責を担うことになりました。身の引き締まる思いで、水産大学校にお

ける教育・研究活動の充実に向けて尽力する所存です。

水産大学校は農林水産省を主務省とする我が国唯一の水産の高等教育機関で、「水産業に貢献する人材の育成」という設置目的を課せられています。昨年度には大学評価・学位授与機構から学士・修士教育課程の継続審査を受審し、5年の継続認定を受けました。また、日本技術者教育認定機構(JABEE)から国際基準にある技術者教育プログラムとしての継続審査を受け、最長6年の継続認定も頂きました。さらに、国土交通省からも船舶職員養成施設(専攻科)としての指定を受けています。本校における水産教育はまさに王道を行くものと意を強くしているところです。

本校の教育体制のもと、本年3月卒業・修了生の就職率は95.5%、そのうち水産業及び関連産業への就職率は88.2%と例年同様の高い値を記録しました。このことについては、皆様からの多大なご支援による本校キャンパスでの合同企業説明会、さらに各学科長クラスの先生による企業訪問などの地道な広報活動の賜物と考えています。

本年4月には、本科213名、専攻科44名、水産学研究科11名の新生を迎えることができました。

本科については倍率5倍強を勝ち抜いた学生たちです。これは、教授陣による高校訪問や進学セミナー、オープンキャンパス等を通じて、本校の充実した教育内容や特色、就職率の高さ等への理解が浸透して来たことによると考えています。こうした活動も皆様の継続的なご協力によるもので、改めて深く感謝申し上げる次第です。

言うまでもなく、水産業の果たすべき役割は、人類の生存に不可欠な海洋生物資源を安定的に供給することです。しかし世界は、人口の爆発的増加や地球環境の劇的变化など、多くの問題を抱えています。さらに、様々な価値観の違いが明らかになる一方で、人、物、金の流動するグローバル化が益々加速すると考えられます。そんな中で、「持続可能な社会」を実現するため、地域にあっては、現場に密着した活動を通して生態系と調和した持続的水産業の推進を図ること、国際的には、各国と協調して限られた海洋生物資源を適切に利用・管理していくことが、水産学を学ぶ私たちに課せられた重要な課題です。これらの課題に対して、水産大学校では、基礎と実学とが統合したローカルかつグローバルな視野から水産学を学ぶ場を提供していると自負しています。学生には水産に関する基礎学問と専門分野の実学を着実に学習し、現場での問題解決能力、創造力と実践的指導力のある人材に育ててもらおうべく、さらなる教育の充実を図りたいと考えております。

来年度には、本校は水産総合研究センターと統合し、一つの研究開発法人となる運びですが、本校の教育体制と機能は変わらず維持されることとなっています。むしろ水産研究・調査部門とのシナジー効果により、水産実学教育の強化を図れるものと期待しているところです。平成29年度竣工予定の練習船新天鷹丸は、調査部門との共用船としてその先駆けとなることでしょう。

大学教育が今後どうあるべきか、本校外では侃々諤々の議論が吹き荒れている昨今です。本校は、その嵐にも柔軟に対応しつつ、水産教育を堅持し強化して行く所存です。皆様には、今後とも一層のご支援とご協力をお願い申し上げます。

最近の話題

海洋水産実習(乗船実習)について

水産流通経営学科 助教 小竹 直 樹

本年4月18日から24日までの日程で実施した水産流通経営学科の乗船実習について紹介します。当

学科の2年生20名が生物生産学科3年生と共に耕洋丸に乗船した今回の実習では、長崎県五島列島の南西80km沖で主に海洋調査とトロール操業を行いました。水産物の流通について学ぶ当学科の学生は、この実習で漁業の現場を学び、社会規範の必要性も学びました。

漁業の現場を学んだ今回の実習、特にトロール操業が学生の記憶に残っているようです。日夜釣りに勤しむ学生でも一度に多くの魚が水揚げされる様子を目の当たりにするのは稀で、水揚げされた総重量100kgを超える魚が網から甲板へ色鮮やかに拵げられると、その迫力に思わず驚嘆の声が上がりました。一時の驚きは一様でも、この水揚げに対する捉え方は学生によって様々です。例えば、過剰な漁獲量と捉えて水産資源保護の必要性を考える学生がいる一方で、過小な漁獲量と捉えて漁業経営を心配する学生もいました。その是非はともかく、この実習によって実感をともなって問題意識を持ったようです。また、大きく重い網を大型ウインチで扱うトロール操業には常に危険が伴うこと、そして豪快に見える漁の準備には、破れた網を丁寧に補修する地味な作業も欠かせないこと。学生はこうした現場の実情も学びました。もちろん、練習船での体験が漁業現場の状況と異なる事は理解した上で、今回の実習は、学生それぞれの視点から水産資源保護や漁業経営、労働環境など漁業が抱える課題に着目するきっかけとなったようです。

さらに、本実習は社会規範の必要性を学ぶ良い機会でもありました。身なりは整え、挨拶の励行、時間厳守が求められる船内生活は、弛んだ日常を過ごす学生には厳しく感じたようです。しかし、船内でトラブルなく集団生活をするためには、各自が社会規範を遵守し、自らの責任を果たすことが重要であると理解したことでしょう。船酔いに苦しむ学生も課業に参加し、食事当番や掃除を欠くことなく行っていました。こうして各人がなすべき事に懸命に取り組む姿からは各学生の成長が窺えました。

実習では、鎌野船長をはじめ乗組員の皆様から丁寧なご指導をいただき、お陰様で学生は充実した実習期間を過ごせました。スマートフォンが繋がらないばかりか、船酔いにも苦しみ「二度と船には乗りたいくない。」と漏らす学生もいましたが、そうした経験も含め、この実習経験が各人の水産業に対する理解を深め、水産人として活躍するための糧となるに違いありません。今回の実習を足掛かりにさらなる成長を続ける学生を、担任として引き続きサポートして参ります。



アンコウがとれた

漁獲物の選別



漁獲物の計量



着任のご挨拶

海洋生産管理学科 助教 嶋田陽一

平成27年2月1日付で海洋生産管理学科・海洋生産運航学講座に着任致しました嶋田陽一と申します。元々の専門は海洋物理学（海洋の流体現象に対して物理学的な観点から研究する分野）です。現在は航海・運航と気象・海象を融合した理工学的な研究を行っております。研究テーマとして、気象・海象データを活用した漁船・一般航行船舶の最適航路選択（ウェザールーティングと言われます）、安全・環境・経済を統合した漁船・一般航行船舶の航海シミュレーション及び気象・海象の影響下の漁船・一般航行船舶の動向等を挙げております。

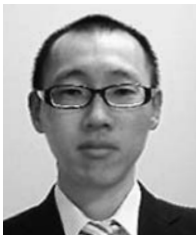
私は中国地方最高峰である伯耆富士（大山）の麓に位置する鳥取県米子市で育ち、鹿児島大学水産学部へ入学後、北海道大学大学院地球環境科学研究科修士課程、博士後期課程に進学し、博士号を取得しました。大学では地球自転影響下の海洋波動、西岸境界流（例えば黒潮）の勉強に励み、理論・数値モデルを用いてオホーツク海の西岸境界流である東カラフト海流流量の季節変動に対する海底地形の影響の研究を行いました。学位取得後は海洋観測による研究も考えており、在学期間中に観測船に多く乗船しました。研究員時代には、これまでの技術を活用して海洋観測、最適航路探索モデル及び潮流発電等の幅広い仕事に携わってきました。その中で特徴的な研究のいくつかは、(1) 東日本大震災の津波に

より青森県八戸市の港から流された漁船がカナダ沖合で発見された事例を参考にした漂流船挙動シミュレーション計算が事例と同じ傾向を示したこと、(2) ある時期の黒潮大蛇行発生スイッチが台風通過による可能性があること、(3) 航海シミュレーションを用いて北極海航路が開通する指標となる海域を特定できたことがあります。

こちらへ着任してまだ日が浅いですが、卒業論文・研究、就職活動及び海技士試験勉強に懸命に取り組むまじめな学生を眺めると、学生への教育指導及び自分の研究に良いドライビングフォースを与えてくれます。また、本校の伝統的な水産学教育の一方、電子海図情報表示システム(ECDIS)、自動船舶識別装置(AIS)等の新しい航海用機器の教育に取り組む時代において、安全な海上輸送を行う人材育成に携わる責任を日々実感し、身が引き締まる思いが致します。何か至らぬ点もあるかと存じますが、ご指導ご鞭撻を受け賜りますようよろしくお願い申し上げます。

着任のご挨拶

海洋機械工学科 助教 椎木 友朗



平成27年3月1日付けで海洋機械工学科海洋機械学講座の助教に着任致しました椎木友朗(しいぎともを)と申します。

私は、山口県防府市の出身で、愛媛大学工学部機械工学科を卒業後、愛媛大学大学院理工学研究科で修士課程を修了し、京都大学大学院農学研究科で学位(博士(農学))を取得しました。

私は、これまでに農業工学に関する研究に携わり、特に農業の省力化および情報化に関する研究を行ってきました。農作業の自動化技術は盛んに研究されており、トラクタ、田植え機、コンバインなどが技術的には無人で作業が行えるようになってきております。これらの農業機械が自律走行するためにGPSの位置情報を用いることが多いのですが、中山間地域やグリーンハウスなどの屋内ではGPS電波が受信できない場合があり、GPSに代わる測位方法が求められています。その中で、私は、スペクトル拡散音波を用いた測位法に関する研究を行ってきました。またその他に、収穫作業の自動化のために、イチゴ収穫ロボットやアスパラガス収穫ロボットの研究を行いました。特に、ステレオビジョンやレーザレンジファインダを用いた対象物の認識と位置計測アルゴリズムの作成を行ってきました。

また、今まで農家の勘と経験から行われていた農作業を、栽培中および収穫後の農作物や栽培環境を計測し、それらのデータを基に生産性と品質の観点から効率的で最適な作業を目指す精密農業に関する研究が盛んに行われてきました。このような試みは、農業だけでなく畜産や水産業にも展開されています。今までに、私は、肥育中の黒毛和種のセンシング技術および肥育中の情報を管理するためのデータベ-

スに関する研究にも関わってきました。

世界的な人口増加と健康志向に伴い、食料の量と質が求められる中で、食料生産を生産システムとして捉え、省力化技術と情報化技術を用いて生産性および品質の向上を目指すことは、ますます重要になるのではと考えております。水産業に関する問題、課題、ニーズなどを把握し、これまでの知識と経験を活かしながら、研究と教育を通して食料生産の重要な役割を担う水産業に貢献できるように努力したいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

教員生活を振り返って

食品科学科 特命教授 田上 保博

今年3月に定年退職しまして、現在は再雇用で働いています。38年間、教員として働きましたが、教員生活の感想を一言で申し上げれば、教育(授業)は楽しく、研究は苦しかったということでしょうか。



九州工業大学の大学院修士課程を修了する時は、オイルショックの為に就職難で、3つの企業の採用試験を受けましたが不合格でした。今と違って、当時の理工系大学生の就職は大学推薦で、1つ受けると決まるのが普通でしたので、異常なことでした。3つも落ちたものですから、自分は人間的に欠陥があるのではと、自信をなくしていましたが、寺田先生(授業を一度も習ったことがなく、全く面識がない先生)から、大学に残って働かないかと声を掛けて頂き、仕方なく教務職員(助手の下の身分)として大学に残ることにしました。ただ採用に当たっては条件がありまして、大学院の時の専門(化学工学、これは食品工学と同じ分野)ではなく、何と有機合成化学(大学4年生の時の卒論の分野)の研究をすることでした。1年掛けて研究テーマを探し、最初の論文が出るのに6年も掛かりました。6年もの間、実験が進まず、論文が書けないで非常に苦しい思いをしました。仕事は1年生の化学実験をみることで、卒論生(平均して4名)の面倒をみることでしたので、楽しいことでした。

恩師は学生の教育より、研究に重きを置く人でしたので、いかにもいい論文を書くかでした。また、恩師はお金は出すが、口は出さない人で、私も必死で、家族を放ったらかして、朝9時から夜12時頃まで実験をしました。昭和58年にシコニン(漢方薬で、紫色の植物色素)の全合成を世界で初めて成し遂げることができ、イギリスの学会誌に掲載して貰いました。十数年後、米国のスクリップス研究所のニコラウ(有機合成化学で、ノーベル賞受賞の最も可能性の高い人)から、ドイツの世界的に有名な雑誌上で、私の仕事をパイオニアの仕事だと評価してもらったのには感激しました。今でも世界中でシコニンに関する研究が行われていることは嬉しい限りです。

平成2年に水産大学校の製造学科(現食品科学科)に赴任して参りましたが、幸いなことに助手でも1

人で研究室を構えることができました。研究ではアクキガイ科の貝のアカニシなどが産出する貝紫色素(クレオパトラが愛用した高貴な色素)を1日で合成する方法を開発しました。他方、教育ではここ10年位は食品科学科で有機化学と機器分析を、全学共通で基礎化学(水産流通経営学科と海洋機械工学科)を担当しました。他学科の学生さんの授業を担当することも、楽しいことでもありました。

水産大学校で丁度、四半世紀お世話になりました。企業のエンジニアになるという夢に反して、不本意ながら大学に残りましたが、幸せな教員生活だったと思っております。最後に、支えてくれた妻に感謝したいと思います。

着任のご挨拶

生物生産学科 助教 南 條 楠 土



平成27年4月1日付けで生物生産学科生物環境学講座に着任いたしました南條楠土(なんじょう くすと)と申します。本学では、「水産資源生態学」、「水産資源生態学実験」の講義を担当させていただきます。私

は干潟、砂浜、藻場などの沿岸浅海域における魚介類の生態学を専門としています。

私は山と海に囲まれた神奈川県鎌倉市の出身で、小さい頃から動物好きの両親に連れられて身近な海や川に出かけては魚やカニなどを捕まえていました。今思うと、この幼い頃の経験が現在の研究のベースとなっていることを実感します。市内の高校を卒業後、海の生き物についてもっと深く知りたいという思いから東海大学海洋学部へ進学しました。その際、沖縄県西表島で卒業研究を行う機会に恵まれ、南の海とそこに棲む魅力的な魚たちに強い興味をもちました。東京大学大学院農学生命科学研究科へ進学後も、南の海への思いから沖縄県西表島をフィールドとして研究を進めました。沖縄地方のような熱帯の河口干潟には、マングローブとよばれる耐塩生植物が生育しており、そのような場所には多くの魚たちが棲みついています。大学院の5年間の研究において、私は毎日毎日水に入って河口域に棲む様々な魚たちの様子を観察し、時折ユニークな野外実験を取り入れながら、多くの魚類が熱帯の河口干潟域で共存して生息するメカニズムの解明に挑みました。学位を取得後、研究員として東京大学大気海洋研究所に移りました。所属研究室では、イワシ類やアワビ類などの資源生物の生態的特性から、それらの資源変動機構を解き明かそうと試みる研究が日々行われており、これまで純粋に生き物としてみていた魚介類の資源生物としての側面に着目することを学びました。これらの経験から、現在は山口県内をはじめとした西日本地域の河口干潟域において、魚介類の分布、食性、成長様式、繁殖様式などを調べることで、資源生物の生産機構の解明に取り組みたいと考えています。

私の研究スタイルは、沿岸のフィールドへ出て暑さや寒さに耐えながらそこに棲む魚介類の生態と生息場の関係を知ろうとするものです。このようなフィールドベースの教育、研究活動を通して、水産生物が身近な沿岸浅海域で育まれることや、その環境条件と水産生物の生産とは密接な関係があることを学生に伝えていきたいと思っております。今後とも、ご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

着任のご挨拶

耕洋丸 三等航海士 川 戸 悠 可

残暑の候、皆様におかれましてはますますご清祥のことと存じます。

ご挨拶が遅れましたが、平成27年4月1日付けで練習船耕洋丸三等航海士に着任致しました川戸悠可と申します。どうぞよろしくお願い致します。



私事ではございますが、経歴について紹介させていただきます。出身地は岩手県盛岡市です。地元の高校を卒業し、平成20年に本校の海洋生産管理学科へ入学致しました。本科で4年過ごした後、専攻科船舶運航過程へ進学し、平成25年に卒業致しました。卒業後は(有)三原汽船へ入社致しました。三原汽船は内航商船会社であり、航海士、機関士として女性が多く活躍しています。入社して最初に乗船した船舶でも女性がチーフオフィサーとして生き生きと働いていました。私自身もとても働きやすい職場だったと思っています。乗船した船舶は総トン数498トン、749トンが主でした。2年間で石灰石船、アスファルト船、RORO船、コンテナ船等様々な種類の船舶に乗船させて頂き、荷役の仕方や航海当直、甲板作業等多くの経験をする事ができました。

縁がありまして、練習船耕洋丸三等航海士として働かせて頂く事となり、今年の4月から生物生産学科2年生と水産流通経営学科3年生を乗船させての東シナ海トロール実習、専攻科を乗船させての天皇海山における海底地形調査を終えましたが、大変刺激的であり自分自身の未熟さを痛感した航海となりました。しかし、そのような航海の中でも学生が一生懸命実習に取り組んでいる姿には何度も励まされました。

まだ微力ではありますが、母校の練習船で水産教育や海技士教育、海洋調査の一端を担うことができる事をとても嬉しく思います。また、女性船員の経験を活かし、これから女性が多く活躍できるよう貢献したいと思っています。

本船乗組員の方々や、本校の諸先生方にご指導頂き、今までの経験を活かしつつ、また一から学ぶ姿勢で日々努力していく所存であります。

今後とも皆様のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。未筆ながら、皆様のご健勝とご多幸をお祈りしつつ、ご挨拶申し上げます。

在校生の声

水大での日々を振り返って

水産流通経営学科2年 森 洸 介

私が水産大学校に入学して1年ちょっと経ちました。振り返ると、実習などで同じ学科の人と、部活動などで他の学科の人と仲良くなりました。そのおかげで、今ではとても充実した日々を過ごしています。

勉学では、1年次は英語や物理などの教養科目を主に学びました。2年次は、私が所属する学科では水産経済学、経営学、流通といった専門科目を学び、専門分野を学んでいるという実感を持っていました。

部活動では、入学してから間もないころ、私は興味のある部活を友達と見学していました。その中で自分の興味のある水産生物を飼育しているアクラスという部活に入部することに決めました。アクラスという部活は、生物研究とボランティア活動を兼ねている部活です。アクラスの活動のなかで、生物の飼育の難しさ、特徴やボランティアの大変さ、喜びを学びました。

実習では、魚市場に実際に行き、漁業者から話を聞いたり、質問したりし、今の漁業状況を生で知ることができました。また、専門の講師の指示を聞いて、鯛やヒラマサを自分たちで調理し食すこともしました。これは、魚の調理の難しさ、魚の美味しさを知る良い経験でした。

残りの大学生活は、就職に活かせるような資格、検定に挑戦し、明確な目標が持てるように大学生活を有意義なものにしていきたいです。

目標達成に向けた取り組みから学んだこと

海洋生産管理学科3年 松 崎 真 和

私は、本校にサイクリング部を結成したいという目標がありました。そして、その目標を今年度5月に達成することが出来ました。平成26年4月に同級生達とサイクリング同好会を結成し、1年間の活動を経て、学生自治会より部への昇格が認められました。

部への昇格に向け、まず力を入れたことは、活動の安全対策です。サイクリングは公道がメインフィールドとなるため、事故防止への徹底した安全対策を検討した危機管理マニュアルを作成し、メンバー内での安全講習会も実施することとしました。

また、同好会が部へ昇格するには、大会等で実績を残す必要があります。平成26年11月に三重県鈴鹿市の鈴鹿サーキットで行われた「スズカ8時間エンデューロ秋sp」に出場しました。8時間でチームの総走行距離を競う耐久レースです。初参加の結果は、659チーム中65位と好成绩でした。レース後にインタビューも受け、大会HPにて本校サイクリング

同好会が全国で紹介されました。このような活動、実績が評価され、部への昇格が認められたのだと思います。

サイクリング同好会を結成し、部へ昇格させる活動を通し、私が学んだことは、大きく難しいと感じる課題でも、まずはアクションを起こし、挑戦することが大切であることです。今まで、私は目標を実現できるか、できないのか、先に結果ばかり考えていました。しかし、それでは前に進めず、何も生まれません。今回のサイクリング同好会を部へ昇格させる経験を通し、安易に結果を求めず、まずは取り組んでみることで、目標達成に向けた仲間との協力、そして継続した努力が大切であることを身に染みて学ぶことができました。

水産大学校に入学して

海洋機械工学科1年 森 枝 晋

私が水産大学校に入学して、まず思ったことは、「すごく田舎だなあ」と感じたことです。しかし、入学してから日にちが経った今、田舎での生活も悪くはないし、大変充実しています。入学した当初は高校時代物理を履修していなかった為に、海洋機械工学科で授業に、ついていけるかが心配でしたが、伊沢先生の物理学演習などがあり、その心配も無くなりました。

水産大学校に来たからにはマリンスポーツの部活動に所属したいと思い、現在ヨット部に在籍していますが、先輩方から優しくして頂いており、楽しく部活に取り組んでいます。また、休日には海で泳いだり、釣りをしたりして、アウトドアな生活を実践しています。

今では、水産大学校に入学して、本当に良かったと思います。

「続けること」

食品科学科2年 窪 田 暉

水大に入ってから水泳を始めて2年目、人生初のバイトを始めて2年目になりました。水泳の練習は苦しいことの方が多いですが、いい仲間と環境と顧問の先生に恵まれたおかげで、体力的にも精神的にも成長を感じられています。また、結婚式場で清掃のバイトをしています。式場は広く作業工程は多いため体力も集中力もかなり必要です。1年経ってようやく視野が広がるようになり清掃技術も上達してきた気がします。正直、水泳でもバイトでもやめたいと思ってしまうことがあります。でも、自分がやろうと思って始めたことを大変だからという理由でやめるのはとても残念なことだと思います。そして、続けてきたからこそ成長を感じられ、喜びを感じられ、その積み重ねが自信になったり自分の心や生活の支えになったりしていくのかなと考えられるよう

になりました。

私は食品の持つ機能性にとっても興味があって水大に came ました。様々な講義を受けていくと食品分野がいかにいろんな分野とつながりを持って深まっているのかを実感します。興味を持った最初の気持ちを大切に、将来を見据えて今築いていかななくてはいけない自分自身の基礎固めを継続的に毎日コツコツしていきたいなと思います。

実習を通して学んだこと

生物生産学科3年 水谷友草

水産大学校に入学してからいつの間にか2年以上が過ぎ、私は3年生になりました。入学式では自分が思っていたよりも学科内の女子学生が少なく、これから始まる大学生活に不安を感じたことを覚えています。しかし、次第に友達も増えて、不安はなくなってきました。

生物生産学科は練習船や付属実習場を利用した実習科目の多い学科です。私は入学前からこれらの実習が楽しみでした。しかし、実習は自分が思っていたよりも大変で、大人数で共同作業をするには協調性や人との連携が大切であることを学びました。また、実習では普段あまり話さない人と話す機会も増え、そのおかげで友達が増えました。乗船実習や様々なフィールドワークは、これまで体験することのなかったことばかりでした。実習が全て終わった今、大変貴重な経験をしたと思います。実習科目の経験から、自分がこれからどんなことを行いたいのかを見つけることができました。

もう少しで3年生の後期に差し掛かろうとしています。後期には所属する研究室も決まり、就職活動

も近づいて来ています。これからは、大学生活を楽しみつつも自分と真剣に向き合っていきたいと思います。

本校研究科に進学して

水産学研究科1年 坂田祥磨

私は、この春に海洋生産管理学科を卒業して水産学研究科に進学しました。現在、私が所属している漁具学研究室では、持続生産可能な漁業生産システムを構築するための漁具の開発や改良および集魚灯に対する魚群の対光行動の分析など多岐にわたって研究が行われています。そのような研究室において、私は4年生から小型底曳網漁業におけるミズクラゲ混獲防除装置の開発に取り組んでいます。ミズクラゲは毎年6～8月にかけて大量に発生します。そのため、漁業者はミズクラゲが大量に入網することによって発生する漁業被害に長年、悩まされてきました。

そこで、私はミズクラゲと漁獲対象種との形状の違いに着目して、ミズクラゲのみを網外へ排出し、漁獲対象種は漁獲することのできる漁具の開発に取り組んでいます。このような漁具を開発することによって、ミズクラゲが入網することで生じる漁獲物の商品価値の低下や網揚げ時の揚網不能などの漁業被害の軽減へ寄与できると考えています。

研究科では講義に加え、研究のための実験やデータ解析など忙しい日々を過ごしています。二年間という短い期間ですが、常に目標を達成するためにすべきことを考えて行動し有意義な学生生活を送っていききたいと思います。

クラブ紹介

ヨット部

ヨット部主将

海洋生産管理学科3年 岡田昂純

私たちヨット部は毎週土日に古宿海岸で練習を行っています。

ヨットと聞いて漕ぐというイメージを持たれる方もいますが、ヨットは帆に受ける風を動力として進みます。強風時には時速20km以上のスピードが出ます。帆や舵を操作したり、体重移動により艇のバランスをとる技術や体力、また、レースにおいては他艇との位置関係や風や海面の変化を察知し、コースを引くための判断力が求められる競技です。また、艇の整備には様々な工具を用いるので日曜大工にも強くなれます。

現在部員は15人で、今年は4年ぶりに女子部員が入部してくれました。主に470級という2人乗りの小型ヨットで全日本インカレ出場を目指して練習しています。

昨年度は広島で行われた中四国インカレで優勝し、愛知県蒲郡で行われた全日本個人インカレに出場し

ました。また、その成績と多年にわたり海に関わる部活としてスポーツの活性化に貢献したことが評価され学内で表彰をいただきました。

大会や合宿では主に岡山、広島、山口へ遠征し、他の中四国水域の大学生と陸では雑談を、海では切磋琢磨しながら親交を深めています。また、毎年11月には韓国釜山の選手との親善試合があり、現地の大学生ともヨットを通じてつながりができます。

楽しいことがある反面、冬の寒さなどから海に出ることがつらい時期もありますが、海に関わる大学の海に関わる部活として活躍できるように頑張ります。



学生部だより

平成26年度における就職対策と進路状況について

学生部長(就職対策検討委員長) 須田 有 輔

本校では学内に「就職対策検討委員会」を設置して学生の就職支援を行っています。委員会は、委員長(学生部長)と各学科長および1年生～3年生のクラス担当教員からなる委員で構成され、事務局として学生課がこれを補佐しています。

主な活動は、(1) 3年生を対象とした自己分析・自己発見のための職務適性テストの実施。(2) 就職活動の専門講師やその他様々な分野で活躍されている講師を招いた就職ガイダンスの開催。(3) 就職手引き書「UniCareer マガジン—大学生の就職編—」を3年生全員に配布し、これを用いた就職指導。(4) 各学科の就職担当者および学生部職員

が、水産関連企業・団体等を訪問し、本校および本校学生の紹介を行うとともに、訪問企業等の人事計画や採用情報の把握。(5) 毎年開催している合同企業説明会等です。

特に、本年3月7日(土)に開催された、本科3年生、専攻科進学予定の4年生および研究科1年生を対象とした合同企業説明会には、近年の不況にもかかわらず、本校からの採用実績のある企業80社の参加があり、企業側、学生側から熱心な説明や質問が行われ、参加した学生からも好評を得ました。

このような活動の結果、平成26年度卒業・修了者の就職希望者177名(本科119名、専攻科48名、研究科10名)の就職率は95.5%で、このうち水産関連分野に88.2%が就職しました。

なお、本科、専攻科、研究科における進路状況および進学・就職内定先は別表の通りです。

平成26年度卒業・修了者の進路状況

平成27年3月31日現在

本 科 専攻科 研究科	修 卒 了 業 者 及 び 数	進 学							就 職 希 望 者 数	就 職										進 路 未 定 者 数	就 職 率				
		水産 関 係 大 学 院	そ の 他 大 学 院	研 究 科	専 攻 科	研 究 生 等	進 学 者 合 計	試 験 準 備 ・ そ の 他		水 産 関 連 分 野											内 定 者 合 計	水 産 関 連 分 野 者 就 職 率 (%)	水 産 関 連 分 野 者 就 職 内 定 率 (%)	全 体 就 職 率 (%)	
										国 家 公 務 員	地 方 公 務 員	各 種 団 体	漁 業 ・ 養 殖	水 産 加 工	水 産 流 通	調 査 開 発 等	資 材 供 給 等	小 計	そ の 他 分 野						
水 産 流 通 科	男	16	0	0	0	0	0	16	1	1	2	0	0	8	2	1	15	1	16	0	93.8	93.8	100.0		
	女	4	0	0	0	0	0	4	0	0	1	0	0	2	0	0	3	1	4	0	75.0	75.0	100.0		
海 洋 生 産 科	男	40	0	1	1	23	0	25	0	15	2	1	0	0	6	1	3	13	2	15	0	86.7	86.7	100.0	
	女	5	0	1	0	2	0	3	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0	100.0	100.0	100.0	
海 洋 機 械 科	男	43	0	2	2	20	0	24	0	19	0	0	0	0	2	0	12	14	4	18	1	73.7	77.8	94.7	
	女	2	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0	100.0	100.0	100.0		
食 品 科 学 科	男	31	1	0	3	0	1	5	1	25	0	0	1	13	5	0	2	22	1	23	2	88.0	95.7	92.0	
	女	19	0	0	0	0	0	1	18	0	0	0	0	9	7	0	0	16	1	17	1	88.9	94.1	94.4	
生 物 生 産 学 科	男	24	1	1	4	0	0	6	0	18	0	0	0	3	4	2	4	13	3	16	2	72.2	81.3	88.9	
	女	2	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	1	0	2	0	2	0	100.0	100.0	100.0		
計	男	154	2	4	10	43	1	60	1	93	3	2	3	1	16	25	5	22	77	11	88	5	82.8	87.5	94.6
	女	32	0	1	0	3	0	4	2	26	0	1	1	0	9	9	1	2	23	2	25	1	88.5	92.0	96.2
専 攻 科 船 舶 運 航 課 程	男	20	0	0	0	0	0	0	0	20	1	0	0	1	0	10	2	5	19	1	20	0	95.0	95.0	100.0
	女	6	0	0	0	0	0	0	6	0	1	0	1	0	2	1	1	6	0	6	0	100.0	100.0	100.0	
専 攻 科 船 舶 機 関 課 程	男	20	0	0	0	0	0	0	20	0	2	0	0	0	7	1	4	14	4	18	2	70.0	77.8	90.0	
	女	2	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	1	0	1	2	0	2	0	100.0	100.0	100.0	
計	男	40	0	0	0	0	0	0	40	1	2	0	1	0	17	3	9	33	5	38	2	82.5	86.8	95.0	
	女	8	0	0	0	0	0	0	8	0	1	0	1	0	3	1	2	8	0	8	0	100.0	100.0	100.0	
研 究 科	男	7	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	0	1	1	0	3	5	2	7	0	71.4	71.4	100.0	
	女	3	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	1	1	1	3	0	3	0	100.0	100.0	100.0	
総 合 計	男	201	2	4	10	43	1	60	1	140	4	4	3	2	17	43	8	34	115	18	133	7	82.1	86.5	95.0
	女	43	0	1	0	3	0	4	2	37	0	2	1	1	9	13	3	5	34	2	36	1	91.9	94.4	97.3
	計	244	2	5	10	46	1	64	3	177	4	6	4	3	26	56	11	39	149	20	169	8	84.2	88.2	95.5

【就職先の分類】

水産関連分野

- 各 種 団 体 : 水産に関する団体(漁業、流通、船舶等関係団体)
- 漁 業 ・ 養 殖 業 : 水産動植物の採捕又は養殖の事業者
- 水 産 加 工 : 水産動植物を原料又は材料として、食料、肥料その他の有用物を生産する事業者
- 水 産 流 通 : 水産物の貯蔵、運搬、販売等の流通に関する事業者
- 調 査 開 発 等 : 海洋水産関連の調査会社
- 資 材 供 給 等 : 水産業やそのサービス部門等に資材供給等を行う関連事業者
- そ の 他 : 水産業関連分野以外の公務員・団体・企業など

平成26年度卒業生進学・就職状況一覧表

平成27年3月31日現在

<p>◎進学 (大学院等)</p> <p>九州大学大学院 東京海洋大学大学院 名古屋大学大学院 三重大学大学院 山口大学大学院</p>	<p>一番食品 一富士フードサービス 伊藤忠飼料 茨城水産 上田商会 うおいち 宇和島運輸 エコニクス NYK LNG シップマネージメント 尾道造船 オリジン東秀 角上魚類 鹿児島船舶 カネテツデリカフーズ 川崎汽船 関西スーパーマーケット 関西ベストフーズ 神田造船所 キューピー 共同船舶 極東電視台 極洋 旭洋造船 クニヒロ 栗林マリタイム 栗原建工 グローバルオーシャンディベロップメント 桂新堂 神戸海事検定 五栄土木 コープ食品 ゴトー養殖研究所 西昆 佐渡汽船 山九 サンヨーフーズ JX オーシャン JRCS 清水建設 シモセン</p>	<p>商船三井 商船三井テクノトレード 商船三井フェリー ショクリュー 新日本海フェリー 水土舎 鈴廣蒲鉾本店 ゼニライトブイ 大京魚類 ダイキンアプライドシステムズ 大晃機械工業 大庄 ダイハツディーゼル 大洋エーアンドエフ T A I Y O 高田魚市場 タカミヤ 中央魚類 中冷 チョーコ醤油 鶴丸海運 ツルヤ T I S 東亜建設工業 東海澱粉 洞海マリンシステムズ 東都水産 東洋水産 東洋冷蔵 トーテックアメニティー 永池 名古屋海産市場 西兵庫信用金庫 ニチモウ 日糧製パン 日新興業 ニッスイマリン工業 日鉄住金テックスエンジ 日本海洋科学 日本海洋事業</p>	<p>日本水産 日本水族館 日本ゼネラルフード 日本マクドナルド 日本かつお・まぐろ漁業協同 博多漁師の里 はごろもフーズ 八馬汽船 浜勝 ビーイズム 日の本辦工業 広島魚市場 広島水産 福一漁業 ふく衛門 福岡造船 福島工業 ブルーコーナー 宝幸 ポトリリーフ・エンジニアリング マックスバリュ九州 マリックスライン マルキュー 美須賀海運 三菱重工業 武蔵野 名鉄インプレス 名門大洋フェリー メガ ヤマエ久野 ヤマサちくわ やまだ屋 ヤマト運輸 山信商店 ヤンマーエネルギーシステム ヤンマーエンジニアリング 横浜冷凍 若築建設</p>
<p>◎就職</p> <p>官公庁</p> <p>国土交通省 国土交通省 (船舶) 水産庁 水産庁 (船舶) 海上自衛隊 農林水産消費安全技術センター 大分県 (船舶) 鹿児島県警察 島根県 長崎県 (船舶) 兵庫県 (船舶) 福岡県 福岡県警察 山口県</p> <p>各種団体</p> <p>海外漁業協力財団 航海訓練所 (船舶) 全国共済水産業協同組合連合会 日本冷凍食品検査協会</p> <p>民間企業等</p> <p>東海運 アワーズ アンサー倶楽部 イシイフーズ イシグロ イズミ</p>	五十音順		

平成27年度入試状況

本校の平成27年度入試状況をお知らせします。

推薦・一般入試の志願者総数は953名でした。

昨年11月に実施された推薦入試には、全学科で198名の応募があり、また、今年2月に実施された一般入試には全学科で755名の応募がありました。

一般入試の学科別応募状況は、水産流通経営学科42名(募集人員13名に対する倍率3.2倍)、海洋生産管理学科133名(募集人員23名に対する倍率5.8倍)、海洋機械工学科78名(募集人員23名に対する倍率3.4倍)、食品科学科145名(募集人員27名に対する倍率5.4倍)、生物生産学科357名(募集人員18名に対する倍率19.8倍)でした。

一般入試の過去6年間の志願者数の推移は、21

年度567名、22年度653名、23年度675名、24年度665名、25年度840名、26年度859名でした。

平成27年度入試の志願者総数(一般・推薦)は953名で対前年度比89.8%の結果となり、推薦入試の志願者数は前年度並みであったものの、一般入試の志願者数が755名で104名の減数となりました。

これまで、より多くの受験生を確保するための対策として、教育職員による高校訪問、事務職員が対応する業者主催の進学ガイダンスセミナーへの参加、インターネットを用いた情報提供など、様々な広報活動を行ってきました。

今後もこれら対策の強化を続けると共に、本校の特色と個性豊かな教育方針を全面に打ち出し、魅力ある大学校となるように一層の努力を行う所存です。



水学園だより

独立行政法人 水産大学校 〒759-6595 下関市永田本町2丁目7-1 電話083(286)5111
ホームページ <http://www.fish-u.ac.jp> [発行] 学生課

平成28年にあたって

理事長 鷲尾 圭 司



水産大学校は、4月から「国立研究開発法人 水産研究・教育機構」という法人の中で、人材育成業務を担う部門として下関の地に存続することになりました。これまで以上に研究開発部門からの情報や実践の機会が増えることが期待されます。

昨年の「海の日」に安倍総理が記念演説の中で、海洋人材を二倍に増やすという宣言をして、海洋開発への意欲を示しました。そのアクションプランには、水産人材育成機関として水産大学校が明示され、本校の存続が決定しました。各方面にご心配をおかけした事業仕分けをはじめとする存廃論議に終止符が打たれたことを喜びたいと思います。

さてそうすると、水産人材育成をさらに高度化するにはどうすれば良いかが問われることとなります。その解答が、JABEE（日本技術者教育認定機構）が推奨し、求められているエンジニアリング・デザイン力の教育です。これまでの技術や知識を増やすだけの大学教育を越え、得られた成果を実社会に反映させる手腕を身につけることが求められることとなります。水産の世界にてらして考えてみましょう。

水産業界では長年にわたって「安定供給」と「消費拡大」のお題目を唱えて進んで参りました。しかし、いくら目標に向かって努力しても衰退傾向はとどまらず、明るい未来は見えてきません。こうした閉塞感に包まれたとき、どうするか？

こうした問題解決能力が、これからの水産人材に求められます。

自分の専門分野をしっかり勉強し、先輩の生き方を見習って、情報化時代やグローバル化時代に後れを取らないようがんばる…、ということで解決すると思いませんか？

壁に行き当たったとき考えることは、壁を壊して進むか、迂回するか、あるいは行き先を考え直すか、など柔軟に思考をめぐらすことです。そもそもお題目が正しいのか、と問うことは基本です。本校

は農水省の所管ですから水産基本法をもとに施策が立てられますが、それを鵜呑みにすることを推奨してはいません。かえって、基本法で大丈夫かと疑ってかかる批判的姿勢が大切です。鵜呑みは、安心ですが、慢心につながり、油断を呼びます。お題目にすぎると、実は現場に潜む根本的な課題が見えなくなるからです。

「安定供給」は漁業の夢です。海の様子や気象条件で漁獲はあてにならず、大豊漁があるかと思えば不漁が続くこともあります。それが暮らしの不安定にも直結するので、漁師たちにとって、また水産関係者にとって「安定生産」は昔からの願望でした。しかし、いま求められている「安定供給」は、どちらかといえば流通業界や大手スーパーチェーンの効率化のために要請されています。品ぞろえや流通コストを下げるために、生産者側に圧力としてかかってくるもので、これが場合によっては乱獲に走らせます。

「消費拡大」は魚価安の打開策としても売り上げ向上のためにも「魚食普及」の努力が注ぎ込まれてきました。しかし、イベントを仕掛けても、無料配布は喜ばれても魚食の定着にはつながりませんでした。食生活が多様化し、簡便化が求められる中、手間のかかる食事として魚はイメージ付けられてきたのです。しかし、漁港の朝市など地元の人が本物を求めに行く売り場には、消費者が殺到して大賑わいになっています。一方の「消費拡大」イベントは、行政や業界のアリバイ工作だったのかと疑われそうです。

だから本気で行う魚食普及は、消費の量的な拡大ではなく、「消費の質の改善」が重要なことに気づきます。大量供給の安売り合戦は大手スーパーに任せておいて、少量多品種の地元の魚を美味しく食べる知恵と技を広めなければなりません。それには魚食文化の自信を示し、信頼と信用を積み重ねる努力が必要です。安直なブランド化などでは信用してもらえない時代に入っているのです。

本校がこれから取り組む「水産におけるエンジニアリング・デザイン力の教育」は、個々の専門性ばかりではなく、分野を超えた協力的態度で、問題解決を図るプランづくりと実践です。この作業には教職員ばかりでなく、卒業したOBや現場の業界、そして何よりも学生諸君の参画が必要になります。

課題は上記の魚食普及ばかりでなく、船舶運航の安全やエネルギー環境対策、未利用資源の活用、漁村など地域暮らしの知恵など、海とつながる社会全般に及びます。専門性も研ぎ澄ましつつ、視野を広げて総合的な判断力を養い、現場の幸せを紡ぎ出す

苦勞に喜びを覚えられる人材が目標になります。それは当然一人ではできませんので、仲間と協力するチームワークが必要ですし、折り合いの付け方を学ばなければなりません。

競争社会ではありますが、競り勝っていく2割の人びと以外に、8割のおとなしい人びとや弱者がいることも、また物言わぬ自然環境にも配慮する生き方もあります。人生を選択する自由はあります。そ

の判断にはいろんな価値判断があること知った上、身をもって自分の居場所を見いだす努力も必要だと思います。

水産大学校では、学生だけでなく教職員もそれぞれに海に学び海に遊ぶ中、自分を育てていける場所でありたいと願っています。皆さまのご理解とご協力を引き続きお願い申し上げます。

最近の話題

実習科目「水産経済・流通調査」

の紹介

水産流通経営学科 教授 板倉 信明



1. 当学科と実習科目「水産経済・流通調査」 当学科は平成9年の学科改組で水産情報経営学科として新設され（学生受入は平成11年）、平成20年に現学科名に改称された。学科入学生に対して、水産業界を社会的な視点で考えられる力を教授し、関連業界での中核的役割を果たしうる人材に育成するという学科の基本的な方針は設立時から一貫している。具体的には理論の習得を目指しつつも、それを実践出来るための基礎的知見の習得にも重きを置いている。その一端を担うのが、3年生を対象としたこの実習科目「水産経済・流通調査」（以下、経済実習と記す）である。その他にも、ここで詳細には触れないが1年生を対象とした「水産物フードシステム実習」という主に水産物の生産から消費までの関連分野を調査・見学・体験するものもある。

2. これまでの実施状況 さて、件の経済実習の内容であるが、通常実際に漁業地区へ出かけ、漁協及び漁業者への聞き取り調査を柱にして、他に行政や関連団体関係者の講話聴講、それに関連施設の見学を行っている。2004年～2014年までに協力頂いた漁協を手元にある資料でみると、JF山口管内では、通、萩統括、宇部岬、東和町の各支店、県外では勝本・壱岐市、鐘崎・宗像市、五島ふくえ漁協久賀島支店などである。今年度は、地元下関を対象とした。協力を頂いたのは、山口県以東機船底曳網漁協、下関中央魚市場(株)、下関水産物卸協同組合、(株)シーサット、下関市農林水産振興部水産課、山口県下関水産振興局、水産庁九州漁業調整事務所沖合課である。これら各機関の代表者あるいは担当者に講話をして頂いた。そこで感じるの、本校学生に「現場の実態を教えてやろう」との熱い思いが感じられることである。それは、決していわゆる「上から目線」ではない、「期待しているぞ」という現れではないかと感じられるものである。この点は、今年度の下関地区だけでなく、上記した各地区の関係者に共通している。

3. 本実習に対する担当教員の思い わずか1週

間程の実習で、理論を実践できる実力が備わるとは考えていない。しかしながら、各現場の方々から注いで頂く期待の大きさを、受講した学生諸君が身体で感じてくれたら本実習を実施する意義はあると思っている。それは、在学中も卒業後も彼等にとって大きな糧になるものと考えているからである。

練習船による国際共同調査に関連して

海洋生産管理学科 教授 川崎 潤二

2015年11月から12月の初めにかけて、練習船耕洋丸第55次実習航海（鎌野忠船長）において、SEAFDEC（東南アジア漁業開発センター）と本校間の学術協定の下に、共同調査が実施されました。共同調査に先行して、鎌野船長、前田俊道企画調整役、海洋生産管理学科田上英明教員がシアヌークビルを訪問し、調査内容に関わる事前打合せを行っています。同共同調査は、カンボジア国水域において実施され、田上教員と私は、同国における耕洋丸入港先であるシアヌークビルで乗・下船することで、共同調査に参加しました。また、カンボジア水産局から8名、SEAFDEC（タイ国）から2名の職員が同港で乗船・共同調査に参加しました。

共同調査では、水産大学校4年生（海洋生産管理学科から28名、海洋機械工学科から24名、計52名）が船舶・機関に関する技術や技能習得、漁場や漁業資源のモニタリング技術、漁業資源のサンプリング及び漁労設備や漁獲方法について学習をする中で、サンプリングされたデータ（プランクトン、漁業資源の稚魚（幼生）、漁獲物、海洋観測データ）、またはカンボジア水域の漁船や漁具、漁場特性、漁業資源に関して、カンボジア水産局やSEAFDEC職員から説明を受けました。そして本校学生は水産に関する国際感覚を習得するなど、水産業界や水産関連分野で将来活躍する上で、役に立つ体験や機会を得ることが出来たと思います（写真はカンボジア水産局及びSEAFDEC職員と乗船学生が協同で調査を行



う様子)。

練習船による国際共同調査に関連した活動報告としても一つ、2015年4月22日から3日間のスケジュールで、アジア水産学会(Asian Fisheries Society)主催の東アジア、東南アジア地域における水産教育に関するシンポジウム(The 2th International Symposium on Aquaculture and Fisheries Education、上海)に参加し、主に2012年から2014年の間に本校とフィリピン水産局間で実施された共同調査の結果概要について発表してきました。同シンポジウムでは、日本、中国、韓国、またはタイ、フィリピン、ベトナム、インドネシアなど東南アジア諸国の水産系学部・学科等を有する各大学から、特色ある水産教育について発表がある中、他国水域において、その国の水産局職員が乗船し、水産を学ぶ学生と協同で乗船調査を行うという本校の実習内容や取り組みについては、発表後にFAO職員の方から意見等を頂くなど、水産に関わる特色ある教育として注目されていると感じました。

話はカンボジアに戻ります、シアヌークビル近くに位置するKampotは胡椒の産地として有名であり、港近くの食堂では、魚と新鮮な胡椒の相性が抜群でした。国際共同調査は、同国で3年間実施することとなっており、2016年度もカンボジアとの共同調査が計画されている中、遠洋航海実習で乗船予定の学生の皆さん、百聞は一見(味?)にしかず、入港中に機会があれば、是非味わってみてください。



船舶起源PMの研究で学会賞受賞

海洋機械工学科 准教授 津田 稔

平成27年5月に開催された“公益社団法人日本マリンエンジニアリング学会総会”において、前年5月に発行の学会誌に掲載された論文「船舶起源PMの低減—生成機構の解明と低減の指針」が論文賞(学会で平成26年に発表された最も優れた論文1件)を受賞しました。

本稿では、過去15年に渡り水産大学校の内燃機関研究室が行ってきた船舶用エンジンから排出されるPM(粒子状物質)についての主な研究内容と受賞論文の概要について、年代順に紹介させていただきます。

(1) 平成11年に、船舶用エンジンから排出されるPMに関する研究を開始しました。当時この研究を行っていたのは、東京商船大学(現、東京

海洋大学)と運輸省の船舶技術研究所(現、国土交通省所管の海上技術安全研究所)だけでした。

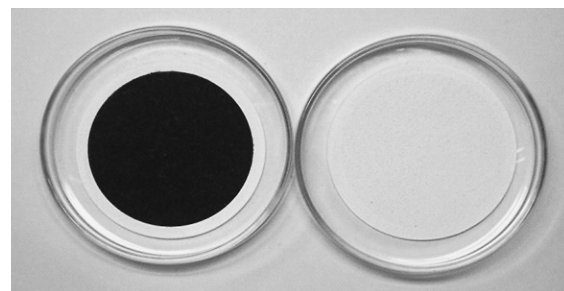
(2) 平成11年の夏に旧耕洋丸において、世界初となるPMの実船実験を実施しました。敢えて夏と記載したのは、船舶を用いた実験で安定したデータを採取しようとした場合、海上が穏やかな夏の日本海が最適と考えているからです。以後の実船実験においても、出来る限りこの原則に従っています。

(3) 平成14年に、改良型PM計測システムを開発しました。これは、PM計測に関するそれまでの国内及び国際規格(JIS及びISO)によれば、燃料油中の硫黄分が0.8%を超える場合の計測は困難とされていました。しかし、ほとんどの外航船と内航船の半分以上は硫黄分が2%以上のC重油を使用しているため、C重油にも適用可能な計測方法を開発する必要性がありました。本校では、全てガラス製のPM計測システムを作製して、計測装置内におけるPMの挙動を明らかにするなどの実験を繰り返し、改良型PM計測システムを開発しました。この装置は、JISにおいても「硫黄分が0.8%以上の燃料にも適用可能なPM計測システム」として紹介されています。

(4) その後も、本校の練習船“天鷹丸”、航海訓練所の練習船“銀河丸”、“青雲丸”でも実船実験を重ね、国内外の学会や国際会議においてその成果を発表してきました。中でも、平成22年にノルウェーのベルゲンで開催された国際会議で発表した論文が、イギリスの関連学会誌(I Mer. EST)に「船舶から排出されるPMの計測」として数ページに渡り紹介されたこともあります。

(5) 受賞論文は、水産大学校が開発し改良をした可搬式高精度PM計測システムを用いて、フィルター方式DPF(Diesel Particulate Filter: PM低減フィルター)のPM低減効果を明らかにするとともに、海上輸送における船舶起源PM低減の指針を示し、実船実験によりこれを検証したものです。なお、この一連の研究成果を、博士学位論文「船舶起源PMの計測と低減に関する研究」としてまとめ、平成26年9月に、博士(工学)の学位を取得することができました。

最後に、船舶用エンジンから排出されるPMの排出特性、生成機構の解明および低減に関する水産大学校の研究成果を世界に発信できるのは多くの方のご協力の賜物です。ここに深く感謝の意を表しお礼申し上げます。



フィルター方式DPFのPM低減効果

着任のご挨拶

食品科学科 助教 辰野 竜平



平成27年10月1日付で食品科学科の助教に着任いたしました辰野竜平(たつのりょうへい)と申します。佐賀県の北西部に位置し、玄界灘に面する唐津市で生まれ育ちました。幼少期は父や弟と共に海へ釣りに行き、

海の生物に対する興味や好奇心を培ってきました。その後も海に生息する独特な生物を観察する機会に恵まれ、高校生になる頃には海の生物に関わる研究者を志すようになりました。高校卒業後は長崎大学水産学部へ入学し、漁業、水産化学、および水産加工などの水産学を学習するとともに練習船による国内外への航海実習を通して知識と経験を蓄えてきました。学部四年生では、講義や学生実験を受講した中で最も興味をひかれたフグ毒などの海洋生物が保有する毒を研究対象とする研究室に配属されました。先行研究の成果により、フグは毒を作る能力がないこと、フグ以外の多様な海洋生物(ヒトデ、貝、カニなど)もフグ毒を持っていること、フグ毒を作り出す海洋細菌が存在することなどが明らかとなりました。すなわち、フグはフグ毒産生細菌を始点とした食物連鎖により高毒化するものと考えられています。現在、フグ毒の研究が始まってから100年以上経過しており、前述した多くの知見が得られています。しかしながら、未だに解明されていない点が多いのも事実です。私は卒業研究として、フグ毒保有魚類の雌個体特異的な毒蓄積機構の解明に取り組み、雌雄で毒性の季節変動が異なること、雌個体は卵巣の成熟が始まる時期に多量のフグ毒を卵巣に取り込むことなどを明らかにしました。フグ毒を原因とした食中毒は他の中毒事例と比べて発生件数は少ないものの死者数が多い危険な事例であるため、上述したデータは食品衛生学の面で重要な知見になると考えられます。長崎大学の大学院進学後は博士課程まで一貫して、フグ体内におけるフグ毒の各組織への移行経路の推定やその体内移行を担う分子メカニズムに関する研究に没頭し、これらの研究内容を取りまとめることで博士の学位を取得しました。その後、数年間の研究員の職を経て、水産大学校に着任する運びとなりました。フグと関わりが深い山口県に来ることができたのも何かのご縁だと感じております。本学では微生物を専門とした研究を展開していく予定であり、これまでと同様に“食の安全への貢献”を軸に研究を推進していきたいと考えております。至らぬ点は多々あるかと存じますが、ご指導ご鞭撻の程よろしくお願いたします。

平成27年度「増養殖基礎実習」について

生物生産学科 助教 南條 楠土

本実習は、生物生産学科の1年生を対象として、



←ムラサキウニの発生実験の様子

↓観測機器の説明を受ける学生たち



←小型船舶を用いた環境観測の様子

水産増養殖を行う場合に必要となる水生生物の特性を体系的に理解し、増養殖に必要な環境要因測定、生物計測、人工授精などの基礎的な技術を習得することを目的として実施しています。約1週間におよぶ実習期間中、学生たちは小野臨湖実験実習場に宿泊し、教員とともに寝食をともにしながら実習を行っていきます。このため、実習場内の生活や野外調査などの共同作業においては相互にコミュニケーションを取ることがとても大切になります。

実習の内容としては、小型船舶を用いた環境観測、ムラサキウニの発生実験、秋穂湾の干潟における底生生物調査と浮遊生物調査の大きく4つの項目からなります。対象が1年生ということもあり、小型船舶に乗ったこともなければ、干潟を歩いたこともない学生が多いため、内容ごとに基礎的なことから習得することを促していきます。たとえば、環境観測においては、フィールドに出る前に室内で観測機器の使用方法を教えます。その際には、船舶で行うことを想定した機器の扱い方と動き方が求められるため、戸惑う学生も見受けられました。しかし、実際に乗船して観測をする際にはしっかりと注意事項を把握して迅速に観測を実施する姿が見られました。このような経験から、観測技術だけではなく、現場を想定した予備演習の大切さを学んでくれたと思います。また、ムラサキウニの発生実験では、受精卵から幼生が孵化するまでの一連の過程を観察します。この発生過程は独自のサイクルで進行するため、私たち人間の生活リズムとは必ずしも一致しません。このため、学生たちは眠い目をこすりながら観察を続けねばならず、対象生物の都合に人間側が合わせるという増養殖における基礎的な姿勢を自ら示してくれました。

秋穂湾のフィールド調査においては、身近でありながらもなかなか見ることのない干潟の泥のなかにいる生物を採集し、種同定や個体数密度の算出などを

行いました。教科書や図鑑でしか見たことのない様々な生き物に触れ、目を輝かせる学生もいたことに私自身も嬉しく感じました。このような沿岸の現場に出る実習を通して、様々な水生生物が身近な自然で育まれることを知り、自らの糧としてほしいと思います。そして、様々な水生生物の保全や増養殖のあり方について、自分なりの考えを確立してくれるよう、今後も実習を続けていきます。

着任のご挨拶

天鷹丸三等機関士 山根基弘



平成27年4月より天鷹丸三等機関士として着任致しました山根基弘と申します。どうかよろしくお願いたします。

私は鳥取県立境高等学校を卒業後、水産大学校海洋機械工学科58期生として入学し、専攻科に進学したのち、水産庁へ船舶職員として入庁しました。入庁してからすぐに漁業取締船東光丸に配属され、そこで三等機関士として6年間勤務しました。そして今年度から、母校である水産大学校へ異動となりました。

漁業取締船では、機関士としての業務とは別に、漁業取締としての業務も行う訳ですが、主として外国漁船を対象に、立ち入り検査や無許可操業船の追跡、拿捕、日本排他的経済水域外への排除行動等を行ってきました。取締業務の中で私が最も危険に感じたのは、取締艇から航走中の違反船への乗り込み

でした。夜間で海況の悪い中激しく揺れる取締艇からの乗り移りは難しく、また真冬に落水すれば命の危険を伴うため緊張の走る瞬間でした。当然危険を伴うアプローチは本来断念するのですが、海況は常に変化するので打ち合わせの段階では許容範囲であっても、取締行動中に悪化することもありました。

そして今年度より練習船へ着任してから早くも半年以上経過しましたが、私は機関士として経験が浅く、まだまだ勉強中であるため、学生指導はもちろんのことですが、本格的に他人の指導にあたるのは私にとって初めての経験です。他人にものを正確に教えることの難しさと、いかに自分が実力不足であるかを痛感しております。入庁して間もない当時は、一刻も早く担当機器の取り扱いや構造を理解し、仕事に慣れたいと思っていましたが、良くも悪くも慣れ出してくると疑問を感じにくくなるもので、学生からの純粋な質問により自分の理解できていない部分を逆に気付かされることが多く、刺激のある日々を送っております。練習船でなければおそらく知らないままであったこともたくさんありました。

卒業してから、学生ではなく指導する立場としてあらためて母校へ帰ってきて思うのは、私にとって水産大学校は学生時代に5年間を過ごした学び舎であって、現在においては今自分の足りていない部分を再認識させてくれる補講授業のような存在であるということです。何かと至らない点も多々あるかと存じますが、誠心誠意をもって最善を尽くし、皆様のご期待に沿うよう努力したいと存じますので、格別の指導、ご鞭撻を賜ります様よろしくお願申し上げます。

就職活動

就職活動のスタート

水産流通経営学科4年 江越沙詠

自分が本当に就職したいのはどの企業であるのか。これをいかに早い時期に見定めるかが、「よりよい就職活動」への大きなポイントになると思います。

私は今年度、水産系の新聞社から内定を頂戴致しました。この職種での就職を志したのは3年生の春です。夏休みのインターンシップ訪問先を考えていたその時期に「自分のやりたい仕事とは？」と改めて考えるようになりました。文章の読み書きが好きだったので、それならば授業で得た水産の知識を活かせる職場で、文章に携わる仕事をやりたいと思い、新聞社への訪問を決定しました。そしてそこが、私が今春から働く企業です。そのインターンシップを終えてより一層この企業で働きたいと思い、周りの方々に支えられながら就職活動を遂げることができました。これから就職活動に臨む皆さん。面接の練習やエントリーシートの添削はいくらでもできます。しかし、その企業に就職したいという気持ちは自分にしか持てません。強い気持ちが、就職活動のモチベーションに必ず直結します。すでに強い気持ちを持ってスタートしたライバルに勝つためにも、自分

のこれからの人生のためにも、今自分にできることを精いっぱい頑張ってください。

就職活動を終えて

海洋生産管理学科4年 井上裕介

私は3月の水産大学校で行われた合同企業説明会から6ヶ月間、就職活動に専念しました。その6ヶ月の間に、私は様々な水産関係企業の説明会に行き、面接や筆記試験などの採用試験を受けました。しかし、残念なことに大半は不採用という結果でした。それでは、その期間が私にとって無駄だったのかというと、振り返ってみるとそうではありませんでした。自分が気になる水産業界の様々な企業を探し、見つけては調べたり、実際に説明会で話を聞いたりして、企業の情報を蓄えてきました。また、私は面接が苦手だったので、本やインターネットでテクニックを学び、不採用となった企業の面接を思い出して、反省点を次の面接に活かしたりしました。その結果、私は9月に香川県漁業協同組合連合会から内定をいただきました。

就職活動中、大半の人は上手いかわなくて不採用通知をもらい、ネガティブになる期間があると思います。私はその経験自体は悪いことではないと思

ます。私たち大学生にとっては社会人の世界は未知の領域です。その期間にどれくらい社会人の世界を見渡し研究したか、また、それらをどのように就職活動に活かすのかが、就職活動を成功させるための鍵であると思います。

皆さんも他大学とは違う水大生ならではの力で、就職活動頑張ってください！

就職活動を終えて

海洋機械工学科4年 矢野大地

私は、3年生の12月頃から第一志望の大島造船所に内定を頂く4年生の9月まで就職活動を行いました。何から始めれば良いかわからず迷うこともありましたが、まずは業界を絞り企業研究から行いました。

企業研究では、実際に会社を訪問し社員の方々から話を聞くことで、ネット上ではわからない会社の雰囲気や個性を感じとることができました。この企業研究を行ったことで様々な企業を知ることができ、就職後も自分の為になる知識を身に付ける事ができたと思います。

そして4年生の春頃から実際に就職試験が始まりました。事前に企業を調べていたことで、エントリーシートや面接において志望動機や入社後の抱負などを伝える事が出来たことが第一志望内定の決め手だったと感じています。

大島造船所以外の企業も対象にしましたが、出身地に近く、世界的に評価を受けている企業に挑戦したいという思いがあったので最後まで気持ちが揺らぐことなく、気合いと根性で乗り越えることができました。

みなさんも就職活動をするにあたって、不安になることもあると思いますが未来の自分像をしっかり持ち、就職への第一歩を踏み出してみましょう。

就職活動を振り返って

食品科学科4年 岩野周平

「切り替え」これは、常日頃心がけていることです。正直、就職活動は面倒くさいです。私自身今でもそう思います。だからこそ就職活動は切り替えが大切です。まずは「視点を切り替える」ことです。面倒くさい、やりたくないという就職活動のなかに楽しさを見出してください。就職活動はいろんな人に出会い、いろんな人の話を聞くことができる良い機会です。遠方に行くときはその土地の美味しいものを食べることも楽しみの一つです。すべてが自分への刺激となります。就職活動をただ乗り切るのではなく、楽しむくらいの気持ちで臨むと良い結果に繋がると思います。

もうひとつ大切なことは、「気持ちの切り替え」です。選考に進んでいくと面接で落ちることもありましたが、そのときは、自分の運命の企業ではなかったのだと、潔く切り替えました。しかしこのときに面接で何を聞かれ、どう答えたのか、面接担当者の質問の意図など書き出して、次の面接に繋がるようにしました。もちろん面接は緊張しますが人と

の会話です。元気に返事をして、笑顔で会話することを意識して面接に挑んでください。

最後に、これから大変だと思いが沢山待ち受けていると思いますが、自分が大きく変わるチャンスだと思って頑張ってください。

私の就職活動

生物生産学科4年 濱田真悠子

私は今年度、大分県庁水産課から内定を頂きました。県職員として地元の水産振興に携わりたいと考えていた私は、はじめは公務員試験の問題に圧倒されて半ば受験を諦めてしまい、様々な企業の公募にエントリーしていました。しかし、研究室を通じて県の水産復興に関わるボランティア活動に参加し、漁業者の方々や地域の子供たちと接することで様々な立場の人が関わる水産業の奥深さを知りました。そこで、改めて県の水産業に携わりたいと考え、受験をする決心をしました。試験前の期間には同じ目標を持つ仲間と互いに励まし合い、さらに積極的に意見交換をして、県の水産業発展へ向けた自らの考えを確立することができました。結果が出るまでは大変長く感じましたが、私にとって就職活動は本当に貴重な経験になりました。

日々一喜一憂する就職活動期間を過ごす私たちを、常に励まして下さった先生方をはじめ、試験当日もエールをくれた仲間や家族、周囲の方々には本当に感謝しています。就職活動は、内定をいただくまで何が正しいのかわからず、まさに暗中模索でした。だからこそ、後輩の皆さまには前向きに就職活動に挑んでいただきたいと思います。ぜひ頑張ってください。

就職活動について

水産学研究科 西翔太郎

私が就職活動を経験して感じたことは「きっかけ」です。まず、私は本校での実習や多くの洋上実験を通じ、野外調査が多い仕事に就きたいという思いを抱くようになりました。しかし、環境調査会社の門戸は狭く、進路に悩んでいました。そのような中で、先生の薦めもあり4年時に学会へ参加し、多くの他大学の先生、大学院生そして研究者の方と接点を持つ機会を頂きました。そして、研究科進学後も多くの人と接する中で、多くの経験をさせて頂くことができました。その経験が自身と志望業界を結びかけになったのだと思います。そして、最終的には海洋環境調査会社では業界大手の会社への内定を頂くことができました。

私は、同研究室の先生方や友人を含めた、多くの人の支えがあったからこそ、志望分野へ進むことができたのだと思います。これから就職活動を行うにあたり、これまでの自身の経験などを振り返って自己アピールを用意しておく必要があります。その時、まだ自己アピールする材料がない人もいるかもしれませんが、今からでも遅くないので、自分の自信や経験になることをできるだけ多く行い、目標に向かって頑張ってください。

学 園 祭

海燕祭を終えて

2015年度学園祭実行委員長 海洋生産管理学科3年
菅 沼 拓 朗

私たち学園祭実行委員会はこれまでの伝統を受け継ぎつつ、さらに盛り上がる学園祭「海燕祭」になるように準備を進め、平成27年10月10日、11日の2日間にわたり2015年度学園祭を無事に開催することができました。

今回のテーマは「霧外滄海」。霧に覆われていても、その外側には青い海が広がる、つまり、困難を乗り越えるとそこには明るい未来が広がる、という願いを込めて水大生ならではのテーマにしました。

今回の海燕祭の開催に向け、私たち実行委員会は5月から活動を始め、地域ボランティア活動に積極的に参加しました。また、山口県の代表的イベントである馬関祭をはじめ、海峡花火大会、海峡まつり、吉見祭、さらには下関市内の他大学の大学祭の手伝

いを行いました。

今年度は、“ご当地アイドルを呼ぶ”という新しい試みを取り入れ、水大生が望むイベントを取り入れつつ、来場者に喜んでいただける企画を考えました。また、毎年好評のフグ鍋配布については、例年の2倍の200人分を準備しましたが瞬く間に配布が終了し、多くの来場者に喜んでいただき嬉しく思います。また、研究室公開や各種講演会も好評であり、トラブルもなく、とても充実した学園祭であったと思います。

私は準備期間を通して、人との繋がり大切さを学びました。実行委員会の活動だけでなく、日々の生活でもたくさんの人と繋がっており、助けてもらっていることを実感しました。多くの苦労はありましたが、最後まで励まし合い一緒に頑張った実行委員会の仲間たちに心から感謝しています。このような経験をいかし、これからの学生生活を毎日有意義に過ごしたいと思います。

学生部だより ～各界で活躍する卒業生～

被災地の復興を目指して

特定非営利活動法人水産業・漁村活性化推進機構 専任指導員
水産流通経営学科65期卒

渡 辺 至 誠

私は平成27年3月に水産流通経営学科を卒業し、4月に株式会社水土舎に入社し、現在は特定非営利活動法人水産業・漁村活性化推進機構（水漁機構）に出向しています。水漁機構では様々な事業を行っていますが、そのなかで私は、漁業・養殖業復興支援事業（がんばる漁業・養殖業）の岩手県の養殖業を担当しています。

平成23年3月11日に発生した東日本大震災により、東北地方及び関東地方太平洋側を中心とした幅広い地域で、水産業への壊滅的な被害や水産物への風評被害等が発生し、漁業をとりまく環境は一変しました。「がんばる漁業・養殖業」は、経営の早期再開及び生産体制の自立を図るとともに、厳しい経営環境の下でも漁業や養殖業を継続できる経営体の効率的かつ効果的な育成を図る事業です。事業の内容は、以下のものです。①国は事業実施者である漁協に、がんばる養殖実施のために必要な事業費を支払います。②漁協は、養殖生産を実際に行う養殖業者グループと契約を結び、必要な経費を支払います。③養殖業者は養殖生産を行います。④水揚物は事業実施者のものとなり、水揚物を販売して得た水揚金により、国に事業費相当額を返還します。⑤水揚金が事業費に満たない場合、赤字分の一部を国が助成します。津波ですべてが流失し、水揚げまで収入が全くなくなる水産業にとって、有益な事業であると言えます。

私が入職してから、あっという間に10カ月がた

ちました。岩手県宮古市から陸前高田市の三陸沿岸の各漁協に事業管理の指導・監査等の業務を行ってききましたが、復興事業特有の難しさを感じています。まず、このような大震災の復興事業は前例がなく、答えのない中でより良い回答を自分たちで作って行かなくてはならない点です。また、当事業は水漁機構が事業主体で実施者が各漁協ですが、漁協も被災者であり、予定通りの円滑な運営ができないこともあります。このような中で、関係者とのコミュニケーション能力や、その応用力が問われることを実感しています。中央の水産庁から地方の漁協や生産者と接する、いまの仕事の現場で、実際経験して学ぶことは多々あり、日々が勉強です。そしてやりがいを感じる事が出来ています。

世間にはたくさんの大学がありますが、大学で学んできたことが、実際の仕事で役に立つことはそうないとおもいます。しかしながら、水産大学はその特殊性ゆえに、大学で学んだことが仕事で生かせる機会が多いと感じます。在校生の方々には、将来の目標を見据えて頑張ってくださいとおもいます。



漁船漁業の現場で働く

大洋エイアンドエフ株式会社(マルハニチログループ)
海洋生産管理学科 63 期卒
(専攻科船舶運航課程修了)

最 上 央

海洋生産管理学科卒(63期)の最上です。平成21年に青森県立八戸水産高校を卒業後、水産大学校に入学しました。部活は、高校から継続してきた端艇部に入部、卒業研究では、マグロ属魚類の研究を行いました。遠洋航海では、東南アジア漁業開発センターとの共同調査において、外国人調査員とともに漁場調査に携わらせていただきました。これら水産大学校での心躍る経験が、今の仕事に就ききっかけとなりました。

私が勤務する大洋エイアンドエフ株式会社は、社名の由来どおり A (エイ) : Agriculture (農業)、Aquafarm (養殖)、F (エフ) : Fisheries (水産)、農産物から水産物まで幅広く取り扱う会社です。私は、この会社でマルハニチログループの原点である漁船漁業を担う航海士を勤めています。漁船の航海士とは、船の運航だけでなく、甲板の作業にも積極的に関わることができ、水産大学校で学んだことが十分に活かせる職です。

入社後、最初に乗船したのは、下関の底引き網船(第3、5やまぐち丸)です。平成13年に建造した次世代型のモデル船第1、2やまぐち丸(60トン)では、国の新漁業生産システム構築実証化事業に基づき、従来型(75トン級)の2隻で22人体制から同12人体制へと大幅な省人化が実現されました。さらに、平成24年に国の漁業構造総合対策事業を活用し進水した第3、5やまぐち丸(69トン)は、乗船員が8、9人体制となり、さらなる省人化に成功した漁船です。この船では、エンジン小型化による省エネ化、漁獲物の付加価値を高めるために海水水装置等を導入、資源の回復のための漁具等も取り入れられています。

現在は、沖合まき網船(第21たいよう丸)に乗船し、卒研のテーマであったマグロ属魚類に携わることができています。将来は、南米や南アフリカ等の海外で活躍する漁船にも乗船できる可能性もあり、多様な漁業を経験できることに胸が高鳴る思い

です。世界的な水産資源の枯渇により、日本の漁業を取り巻く環境は厳しい状況にありますが、食糧産業としての使命、持続的な漁業生産を果たして参りたいと思います。引き続き、漁業の効率化・適切な資源管理等、皆様のご指導とご鞭撻を賜りたくお願い申し上げます。



沖合まき網船(第21たいよう丸)

全水加工連に就職して

全国水産加工業協同組合連合会 業務部業務課
食品化学科 57 期卒

内 村 衣 里

平成18年度食品化学科卒の内村衣里と申します。私は卒業後、現在まで「全国水産加工業協同組合連合会(全水加工連)」というところで働いています。長い社名で初めて聞かれる方も多いと思いますが、読んで字のごとく全国にある水産加工業者を代表する団体であり、水産加工用の原料の買い付け、品評会の開催、加工屋さんが作った製品の販売、外国人実習生の試験の実施、

国への陳情など業務は多岐にわたります。中でも年に一回行われる「全国水産加工品総合品質審査会」は日本中の水産加工品が一堂に会し、加工技術やおいしさを競う唯一無二の大会であり、日々磨かれている加工屋さんの技術や発想が詰まった商品が審査会場に並ぶ姿は圧巻です。その後行われる表彰式は水産庁、都庁、各国の大使などがプレゼンターとして賞の授与を行い、とても華やかです。



しかし、こういった業務の数に対して、職員数は15名と少数精鋭の為、一人が複数の仕事に携わります。なかでも私は、輸入枠の管理や、インターネットによる販路拡大の情報提供、製品の販売という業務を受け持っています。3つとも内容が異なるため、優先順位を付け、うまく切り替えながら行っています。本会の良いところは、社歴に係らず、風通し良く意見をどんどん言えるところ。会長、常務などがある会議にも参加できるのもこの会社ならではのと思っています。また、業界の特色なのか女性職員は少ないですが、逆にそれを強みと考え、自分の感覚も大事にしながら一つ一つの仕事に取り組んでいます。

学生時代といえば、20歳ごろのクリスマス前に早起きをして工場実習でツナ缶を製造したり、船酔いしながらの乗船実習で、作業服姿でブリの活け締めを行ったことが思い出されます。他業種の方とお話する際、こういった同年代の人がやっていない経験が、興味を持っていただける話題のひとつとなりますので、是非楽しんで取り組んでいただきたいと思います。授業で習ったことももちろんですが、水産大学校でお世話になった先生方や、良い友人との繋がりが、長い社会人生活の中でも大切だなと日々実感していますので、何よりも仲間を大事にし、学生生活を楽しんでください。

学生時代といえば、20歳ごろのクリスマス前に早起きをして工場実習でツナ缶を製造したり、船酔いしながらの乗船実習で、作業服姿でブリの活け締めを行ったことが思い出されます。他業種の方とお話する際、こういった同年代の人がやっていない経験が、興味を持っていただける話題のひとつとなりますので、是非楽しんで取り組んでいただきたいと思います。授業で習ったことももちろんですが、水産大学校でお世話になった先生方や、良い友人との繋がりが、長い社会人生活の中でも大切だなと日々実感していますので、何よりも仲間を大事にし、学生生活を楽しんでください。



水大学園だより

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産大学校 〒759-6595 下関市永田本町2丁目7-1 電話083(286)5111
ホームページ <http://www.fish-u.ac.jp> [発行] 学生課

ご挨拶

校長 酒井 治 己



保護者の皆様並びに関係各位におかれましては、平素から本校の教育・研究にご理解とご支援をいただき、誠に有難うございます。水産大学校校長を拝命してはや1年が過ぎました。まだまだ不慣れではありますが、かわらず水産大学校における教育・研究活動の充実に向けて努力する所

存ですので、よろしく申し上げます。

本年3月卒業・修了生の就職率は98.2%、そのうち水産業及び関連産業への就職率は85.9%と例年同様の高い値を記録しました。このことについては、皆様からの多大なご支援による本校キャンパスでの合同企業説明会の開催、さらに各学科長クラスの先生方による企業訪問などの地道な広報活動の賜物と考えております。

本年4月には、本科205名、専攻科48名、水産学研究科10名、合計263名の新生を迎えることができました。本科については入試倍率約5倍を維持できました。これは、教授陣による高校訪問や進学セミナー、オープンキャンパス等を通じて、本校の充実した教育内容や特色、就職率の高さ等への理解がますます浸透していることによると考えています。こうした活動も皆様のご援助によるもので、改めて深く感謝申し上げます。

すでにお聞き及びの事と思いますが、本校は本年4月から水産総合研究センターと統合し、一つの国立研究開発法人、水産研究・教育機構の水産大学校として新たにスタートいたしました。水産研究・調査部門の成果を教育に活かしたり、研究施設等の相互利用を図ったりすることの相乗効果により、水産

実学教育のさらなる強化を図れるものと期待しているところです。

平成29年度竣工予定の新天鷹丸は、調査機能も併せ持つ練習船として、その先駆けとなることでしょう。現在、995トンの設計がほぼまとまり、今夏の起工、来年秋の竣工に向けて計画の大詰めを迎えている所です。

また、新聞等でご存じの方も多いと思いますが、本校キャンパスに機構の研究部門の一部が機能移転をして、主に水産加工流通分野のサテライトオフィスを設ける事も決まっています。この事も、統合の相乗効果を発揮できる仕組みの一つとなるよう期待しています。

ご存じのように、4月には熊本において地震災害が生じました。本校では、6月13~16日の4日間、耕洋丸が熊本県の三角港に入港して、乗船した専攻科学生46名、教員及び乗組員による復興支援ボランティア活動を行いました。被災者の皆様には謹んでお見舞い申し上げ、一日も早い復興を願う所ですが、学生にとっては、活動を通じて社会貢献の重要性を理解し、計画性、協調性、利他性、自主性などを身に付け、強靱かつ柔軟な精神を涵養して人間力を高めるなどのたいへん貴重な機会になったと考えております。この件に関しても、ボランティア保険加入などで後援会を通じてのご支援を頂きました。深くお礼申し上げます。

水産大学校は農林水産省を主務省とする我が国唯一の水産の高等教育機関で、「水産業に貢献する人材の育成」という設置目的を課せられています。本校は、これからも大学改革支援・学位授与機構からの学士・修士教育課程認定、日本技術者教育認定機構(JABEE)からの技術者教育機関認定、さらに国土交通省からの船舶職員養成施設指定を堅持し、水産実学教育をますます強化して行く所存です。皆様には、今後とも一層のご支援とご協力をお願い申し上げます。紙面でのご挨拶に代えさせていただきます。

最近の話題

はじめまして

理事(人材育成担当) 中田 薫

独立行政法人水産大学校は、本年4月1日付けで国立研究開発法人水産総合研究センターと(以下センター)統合され、国立研究開発法人水産研究・教育機構(以下、水産機構)水産大学校となりました。この水産機構の人材育成担当理事として水産大学校に着任いたしました中田薫と申します。

私の専門は生物海洋学や水産海洋学で、長年水産資源の変動とその生息環境の関係について研究してきました。前任地は横浜・桜木町にあるセンター本部です。研究主幹として、地球温暖化や日中韓の大型クラゲ共同研究などの各種環境関連の研究を中心にセンター全体の研究の進行管理や企画立案に携わってきました。

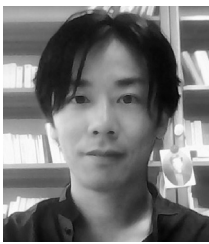


研究主幹となったのが2011年4月で東日本大震災直後でしたから、研究主幹時代の5年間で最も思い入れがあったのは放射能対応を含む震災復興関連の業務です。2011年夏に水産庁の予算が付き、津波の爪痕が生々しく残る福島県の相馬市を一人で訪れて、試験操業すら開始していなかった漁協に放射能測定用の魚介類の採集への協力依頼をしに行ったのが昨日のこのように思い出されます。

さて、統合により、水産大学校は全国に散らばる48庁舎・施設と、練習船2隻ならびに調査船9隻を所有し、さらに常勤・非常勤を合わせて1600人を超える職員を擁する巨大な水産機構の一員となりました。多くの人・施設をうまく活用し、厳しい社会・経済情勢の中にあってもこれまで以上に良質の教育プログラムを学生たちに提供できるようにすることが、大学校の責務です。そのためにも、統合の相乗効果が遺憾なく発揮されるように様々な仕組みを作りたいと思います。具体的なことはこれからの検討事項となりますが、これまでの経験ならびに研究部門との太いパイプを生かして新たな職務に励みたいと思いますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

海と言葉と、

水産流通経営学科 講師 田島 義士



一トンネルを抜けるとそこは「海」であった— 福江と吉見の境にある短いトンネルを抜けた車窓に広がるのは、青い、蒼い、碧い、海。

朝の山陰線に乗って、七曲りの海が見える度に、私は故郷の海を思い出します。私の生まれは港町神戸で、小さい頃から海を間近に育ちました。車窓から海が見える路線は、神戸にもあります。

故郷の匂いを後に水大まで、海を目指して歩いていきます。交通安全のおじさんや路上の猫と挨拶を交わし、校門前で、今日も海が出迎えてくれます。その表情はいつも違います。

水大では、元気一杯の学生、今日はなんだかご機嫌斜めな学生、世の中に反抗してみようと活きのいい学生と共に挑戦の日々を送っています。私の研究対象は「言葉」です。言葉は、人と人を繋げます。そして、それは人と人を隔ててくれます。例えば「おはよう」「さよなら」。日常何気なく使う他愛もない言葉が、もしかしたら誰かの心を優しく癒す時が、あるいは偶さか傷つけてしまう時があるかもしれません。私は、そんな表情に富んだ言葉について、同じく表情豊かな学生と共に考える仕事をしています。

水大での一日が終わると、朝と同じように海辺を歩いて帰ります。沈みゆく太陽と穏やかな海（たまに荒れていますけども）が、見送ってくれます。そんな時に聞こえるのは…。

「見つけたよ!」「何を?」

「永遠。それは太陽と共に行った海。」

私が研究しているのは、たとえば19世紀フランスの若き詩人が放ったこんな言葉です。申し遅れました、フランス語、文学、海洋文化論を担当することになりました田島義士です。この拙い文章を読んでいる皆さんと言葉を交わせる日が来るのを願って。そして、海と言葉と学生と皆さんと…、色んなものが繋がっていきますように。あ、海が笑った。そこからも見えますか?

着任のご挨拶

水産流通経営学科 助教 藤井 陽介



皆さんはじめまして。この4月から赴任いたしました藤井陽介と申します。これまでには主に北海道や千葉に住んでおり、関西より西に住むのは初めてとなります。長らく北海道に住んでいたため、本州は暑くてたまりません。少年時代は三重で暮らしていましたが、そのころと比べても近年は暑いように感じます。また、冬の寒さも堪えるようになってきました。基本的な建物の構造や防寒の考え方が違うのか、北海道では部屋の中で寒いということあまり体験しないことが多かったのが原因でしょうか。雪の日に暖房の効いた室内で半袖になり、炬燵に入ってアイスを食べるといったなんか矛盾しているような冬の過ごし方をしてきた罰が当たったのかもしれませんが。下関市は坂が多いですが長閑な空気が流れ、生活に必要なものは揃いやすいため、住みやすいと感じています。

担当する科目としては、地域振興に関わること、流通経済に関わることとなります。特に地域振興については、こうすれば必ず成功する、そのための理論はこうだ!といったものはありません。また、地域の住民が望むことが産業や商売として成立するかどうかを判断することも困難です。これからは日本全体の人口が減少していく中、元気のある地域、活力のある地域とはいったいどのような姿なのかを、産業、行政、研究など様々な視点、観点から考えていかなければならないのではないのでしょうか。そういった問題に対して、工業で使われてきた、効率的な操業をするための方法論を適用できないかということが、私自身の研究テーマとなっています。まずはこれから、山口県の姿、下関市に暮らす人々の生活を知っていき、自分にできることに取り組んでいきたいと考えています。これからどうかよろしくお願いいたします。

耕洋丸による熊本地震の復興支援活動

水産大学校熊本震災支援チーム 副責任者
海洋生産管理学科 教授 下川 伸也

本年6月13日から16日までの4日間、耕洋丸第59次航海の途次に、乗船中の専攻科学生48名、耕洋丸の乗組員37名及び海洋生産管理学科、海洋機械工学科教員6名の計91名により、「熊本震災復興支援」として被災地ニーズに基づくボランティア活



↑熊本市ボランティアセンター

↑ボランティア活動の様子
三角港入港中の「耕洋丸」と乗船者

動を行ないました。

6月11日に下関港を出港した耕洋丸は、翌12日に三角港へ寄港し、4日間ともに三角港を基点として熊本市ボランティアセンター東区サテライトへ出向いての活動で、参加の延べ人数は157名となりました。

活動内容は、被災者宅からの要望に合わせて瓦礫(瓦、ブロック塀等)の処理、家具・家財品の搬出作業、屋内清掃等であり、さらに、個別のボランティア作業への要望調査を行なうポスティングなどを行いました。各作業ともに、3〜8名程度のグループに分かれ、被災者宅を訪問し、個別の要望に応じた作業を行い、4日間で28件の作業を終えるとともに、ポスティングでは、一人当たり約10軒から調査でき、新規に240軒の被災者宅からボランティア作業の有無や必要とする作業内容等のヒアリングが行えました。

これらの活動を通して、本校からの参加者は、軽微な怪我もなく、無事に全活動を終わることが出来るとともに、参加者個々にとっては作業を通して被災地の現状に触れ、社会貢献の重要性を再認識するとともに協調性、自主性、利他性など身につけるなど絶大な教育効果を収めたものと考えられます。

本ボランティア活動を行なうにあたり、鷲尾理事、中田理事、酒井校長をはじめ「熊本震災支援チーム」及び本校職員、学生の皆様よりご理解とご協力をいただき衷心よりお礼申し上げます。

さらに、一般財団法人水産大学校後援会および水産大学校同窓会「滄溟会」からの資金援助、本校職員からの義援金の提供に対し謝意を表します。

技術士を目指した教育の取り組みについて

海洋機械工学科 教授 石田 武志

水産大学校は5つの全ての学科において、平成20年度に日本技術者教育認定機構(JABEE)から、技術者教育プログラムが一定の水準を維持しているとの認定を受けています。これにより平成21年3月以降に卒業した学生は全員、技術士の一次試験が免除されます。

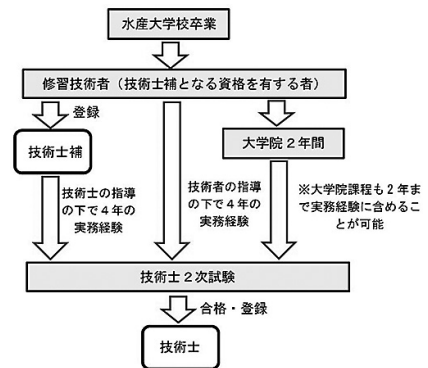
技術士資格は文部科学省が所管する国家資格で、実務経験と知識の両面において優れた技術者を認定するもので、技術系の資格の最上位の資格と位置付けられています。資格を取得するためには、1次試

験及び2次試験を合格することが必要ですが、水産大学校の卒業生は、「一次試験免除」ですので、卒業後、技術者として就職し、4年間の実務経験を積み、2次試験の受験資格を得ることができます。

筆者も、技術士の資格を平成13年に取得しました。当時は現在と受験制度が違い、1次試験を受けなくても、7年間の実務経験で受験することができました。その後受験制度が変更され、1次試験に合格することが必須となり、また1次試験も出題範囲が広がるなど難しくなる傾向があるため、1次試験免除は非常に有利な条件であると考えられます。

また、このJABEEによる教育課程の認定は、3〜6年ごとの審査があるのですが、水産大学校は平成26年度に更新審査を受けて、平成27年度から6年間の認定を得ることができています。またこの審査の中で、今後は「エンジニアリング・デザイン能力」の養成がさらに必要だと指摘が審査員からありました。このため、平成28年度の後期の授業から「技術者倫理」の科目を拡充し、PBL(プロブレムベースドラーニング)

を導入し、学生同士が能動的に学び、議論をし、技術的な課題の解決方法を見出す能力の更なる向上を図っていきたくと考えています。



着任と抱負

食品科学科 教授 山下 倫明

本年4月に中央水産研究所から食品科学科に異動してきました。バックトゥーザフューチャーが流行った1985年に東海区水研に採用になってから、勤続31年になりました。今も昔も最新機材が何もない研究環境で質の高い研究をどこまでやれるかチャレンジです。昔、水研の古い実験室でケルダールとソックスレーの蒸留装置を使って、魚醤油のアミノ酸やペプチドなど成分を分析し、サケ中骨エキスやマイワシすり身、養魚飼料を開発するのが仕事でした。サイエンスと程遠い魚醤油やすり身の研究はもうやらないとその頃、心に誓ったものです。こちらに来て機能性物質の開発プロジェクトを計画したところ、未利用資源の研究をやりたいという卒論生4名が参加してくれることになり、研究室にあるフラスコなどガラス器具を使って、ガラス細工をやり、蒸留装置を組み、溶媒の蒸留や機能性成分の濃縮を始めました。昔のように蒸留をやりながら30年若返った気分です。卒論生は初対面にもかかわらず私の研究室を選



んだだけあって、直感に優れ、好奇心旺盛で、初めての実験や知識をどんどん吸収し、新しいアイデアを提案してくれます。

立派な製造工場があり使ってみたくなりました。4月の時化の後、裏の海岸で拾ったアカモクや水試から送ってもらったヒジキを原料として、無機ヒ素のない加工品が試作できました。これらの海藻には毒性の高い無機ヒ素が含まれることが業界の課題でしたが、これで技術的に解決できると思います。また、機能性成分を蒸留する新しい試みによって、長年苦労した高純度品の製造法に目処がつけられました。新しい研究室を作る喜びを感じています。豊かな発想力をもつ学生を育てるため、10年ぐらいかけて最先端の技術レベルで試行錯誤を試すことができる研究環境を作りたいと思います。

着任のご挨拶

食品科学科 助教 河邊 真也



平成28年4月1日付けで食品科学科に着任いたしました河邊真也と申します。専門は水産化学で、水産大学校では水産物において焦点を当て、その発生機序やにおい改善に向けた研究を推進し、魚食の普及に貢献して参ります。

私は大阪府の出身ですが、高校卒業後は日本海に面した福井県にある福井県立大学の海洋生物資源学科に入学しました。小浜市にあるキャンパスは海も近くにあり、自然豊かな環境の中で大学生活を送りました。学生時代は魚介類を広く扱う食品化学研究室に所属し、様々な海洋生物のサンプリングを経験してきました。私自身は博士号を取得するまで一貫して二枚貝であるマガキを対象として研究をしてきました。マガキは水揚げ後も殻付きの活貝として流通しており、海水のない状態でも数日から数週間も生き続けることができます。この間、マガキ体内では呈味性に関わるエキス成分が大きく変動し、また低酸素や熱ストレス応答に必要な遺伝子群も誘導されてきます。このマガキの持つ環境ストレスへの強い耐性機構を、生化学や分子生物学的手法を用いて解析してきました。これらの研究は、魚介類の適切な流通・養殖技術の開発に結びつくものです。在学中の日本学術振興会特別研究員DC2の採用を経て、学位取得後は他大学の医学部で特命助教として採用されました。医学部では、哺乳類の生殖内分泌学と婦人科腫瘍の研究に6年間携わり、先端の技術を習得しました。

今、水産の世界に戻ってきて数ヶ月が経ちました。学生時代と同様に海に囲まれたキャンパスで教育と研究に勤んでいます。この恵まれた環境に感謝しつつ、これまでに習得した知識や技術をこれからの水産の教育と研究に生かし、水産分野の発展に貢献できるように精進して参ります。未熟で至らぬ点もあるかと存じますが、ご指導ご鞭撻を受け賜りますようよろしくお願い申し上げます。

水産学奨励賞受賞報告

生物生産学科 講師 山崎 康裕

平成28年3月に開催された平成28年度日本水産学会春季大会において、水産学奨励賞(受賞題目:海産微細藻類の種間相互作用と餌料培養への応用に関する研究)を受賞致しましたので謹んでご報告申し上げます。研究を進めるにあたり、多大なご指導ご鞭撻を賜りました皆様方に心より感謝申し上げます。



本稿では、受賞の概要についてご紹介いたします。普段、沿岸海域では様々な種類の植物プランクトンが共存しています。しかし、高密度化した植物プランクトンにより水が変色する「赤潮」は、単一種のみで構成されることが多く、不思議なことに他種は一斉に姿を消してしまいます。このような現象は古くから世界中で確認されており、この謎の解明に多くの研究者が挑戦してきました。その結果、この現象には水温や塩分などの環境要因に加え、植物プランクトンのアレロパシーも深く関与していることが明らかになりました。アレロパシーとは、ある生物の分泌した化学物質により、他種の増殖が抑制されたり促進されたりする現象です。私は、山口県の沿岸域で赤潮を頻発するヘテロシグマという植物プランクトンに注目し、本種の赤潮発生機構について研究してきました。この結果、ヘテロシグマがつくり出すアレロパシー物質を特定し、赤潮発生海域でこの物質が増殖抑制効果を発揮している証拠を掴むことに成功しました。現在は、赤潮研究に加え、これまでの研究で培った知識と研究手法を水産増養殖に関する基礎研究に応用し、全国的に激減したアサリ資源の回復や二枚貝の餌となる植物プランクトンの効率的培養法の確立を目指して研究を進めております。

まだまだ経験不足の若輩者ではございますが、今回の受賞を励みに実学に立脚した研究を進めるとともに、水産に貢献する人材の育成に誠心努力して参る所存ですので、今後ご指導ご鞭撻を賜ります様よろしくお願い申し上げます。

着任のご挨拶

耕洋丸専任教員 小林 良康

平成28年4月に日本海区水産研究所みずほ丸から耕洋丸専任教員として赴任しました。

私は茨城県つくば市で育ち高校生までは海とあまり縁のない生活をしており、海に行くのは年に数回程度釣りや海水浴に行くくらいでした。小さなころから魚が好きで、よく友達と近所の池や川で魚やザリガニをとったりして遊んでいました。普段あまり行けないせいか海には憧れみたいなものもあり、高校卒業後に東京水産大



学(現:東京海洋大学)に進学しました。専攻科に進学すると南極に行けるかもとのことで専攻科に進学し、専攻科卒業後、水産庁に入庁し3年間船予備員として調査船や取締船に乗船、その後11年間釧路と新潟の調査船に乗船し、このたび水産大学校の耕洋丸にお世話になる事になりました。結局南極には今まで一度も行くことがありませんでしたが、釧路の調査船北光丸では鮭鱒の調査で北極圏に入りました。北極圏では太陽の沈まない白夜も経験しましたが、濃い霧のため太陽をほとんど見ることが出来ませんでした。調査船では多様な海洋観測と表中層トロール、着底トロール、マグロ延縄などを経験

してきました。

さて、耕洋丸に来て3カ月経ち、2年生の海洋生産実習と専攻科の乗船実習を終えました。学生を見ていると自分の学生時代を思い出し懐かしく思うこともあり、特に専攻科生は立派で頼もしく感じました。二航海終え、学生に何かを教えるには自分自身しっかりと理解する必要があると改めて感じ、教科書を手にとる機会が多くなりました。今後、学生達と乗船を重ねるうえで、これまで経験したことや知識などを伝達し、自分自身楽しみながら仕事ができるよう、また学生とともに成長できるように努力していきたいと思います。今後とも宜しくお願いします。

在校生の声

水産大学校に入学して

水産流通経営学科1年 横川 流 生

私が水産大学校に入学してまず思ったのは、周囲に豊かな自然がたくさんあることです。私の地元である北海道も自然の多いところでしたが、ここ吉見は海も山も近く、地元とはまた違った田舎さがあったとても新鮮でした。入学してから3ヶ月が経った今、山口の方言にも慣れ、毎日楽しい日々を送っています。私は、高校時代に数学の授業で微積分を学習していなかったため、最初の頃は、大学での「基礎解析学」などの授業に自分がついていけないかどうか不安でいっぱいでした。しかし、今では数学セミナーを受けて微積分の勉強をしたり、苦手なところは友達に教えてもらうなどして、授業が理解できるようになりました。

部活動は、小学校からサッカーをしてきたのでそれを続けたいと思い、フットサル部に入りました。先輩方がとても優しくおもしろいために、楽しく熱心に部活に取り組んでいます。水産大学校1年生チームで、佐賀県で開催された“ドリームワークス”というフットサルの大会に出場したときには、優勝することができました。

水産大学校に入学したからには、これから様々な知識を吸収し、充実した大学生活を送っていききたいです。

水産大学校に入学して学んだこと

海洋生産管理学科2年 高野 雅 貴

私が水産大学校に入学してから早くも一年が経ちました。入学当初は「勉強についていけるか」「友達ができるか」など、不安な気持ちでいっぱいでした。しかし、水産大学校での生活は楽しく、友達もたくさんでき、あっという間に不安な気持ちがなくなりました。勉強面ではきつい時もありましたが、友達といっしょに勉強し、お互いに教え合い、励まし合う中で絆も深まり、乗り越えることができました。

私は学生寮で生活しています。寮では100人を超える先輩方や同級生、後輩と共同生活を送ります。その中では、一人の行動が集団生活を送っている他の人にも影響するため、それぞれが常に他人を思い

やるのが大切であることを学びました。また乗船実習では、パーソナルスペースが限られた船内で集団生活を送り、慣れない生活に辛いと感じることもありましたが、仲のよい友達はもちろんのこと、普段はあまり話すことのない友達とも接する機会ができ、人と人とのコミュニケーションの大切さや友達の大切さを学ぶことができました。

これからは、これらの経験を活かし、将来の夢に向かって充実した大学生活を送っていききたいと思います。

選択をすること

海洋機械工学科3年 田中 勇 樹

水産大学校に入学して2年が過ぎ、3年生になりました。入学当初は知り合いがいないため、不安もありましたが、実験、実習を通してその不安はなくなり、今では楽しい生活を送っています。

私は2年間を振り返り、大学生活は選択の連続だと感じました。時間がある分、学習やアルバイト、部活動、サークル活動、遊びなど自分で選択して過ごすことができます。手を抜こうとすれば、いくらでも手を抜くことができます。また、目標ができれば達成に向けて、いくらでも時間を割くことができる、今しか経験することのできない環境だと思っています。

3年生になった私はこれからの選択が今後の就職活動に直結していくと思っています。以前、「あなたは大学生活の中で頑張ったことは何ですか?」という問いに対して答えることができませんでした。この答えは人それぞれ違っていて無数にあると思います。だから、私は夏に控えている1ヶ月の乗船実習をしっかりと頑張りたいと思っています。そして、胸を張って「私が大学生活で頑張ったことは乗船実習です。」といえるようになりたいです。

水大での生活は残り半分を切っていますが、この大学に来てよかったと言えるように正しい選択をして頑張りたい、今しかない大学生活を楽しみたいと思っています。

“出会い”を大切に

食品科学科1年 栗本 啓 貴

私が水産大学校に入学して3ヶ月が経ち、様々なことを感じ、経験してきました。短いながらもとて

も充実したこの時間を振り返ってみたいと思います。私が大学に入学してはじめて感じたことは、実家と比べて田舎であるこの地でやっていけるのか、勉強や部活動、大学や寮生活はうまくいくのか、という不安です。私の不安を力に変えてくれたのは、“出会い”でした。寮で過ごすこととなった私には、気が付けば気の合う友達ができ、サッカー部に入れば同じ思いを持った仲間や先輩に出会うことができました。相談に乗ってくださった担任の宮田先生や、たくさんの人が支えになっています。

そして、私はたくさんのことを経験し、大学校での“出会い”を増やし大切にしていこうと思いました。英語の高本先生が誘ってくださった下関トーストマスターズという英語のスピーチのクラブに入会したこと、塾講師のバイトを始め子供に勉学を教えること、部活動の遠征で仲間と本気で挑み優勝できたこと、友達と下関の観光地を周って遊んだこと、数え切れないほどの経験をしています。

水産大学校は他大学よりとても小さく、田舎です。しかし、ここでの経験は自分次第でとても貴重なものにすることができます。私はこれから4年間たくさんのことに挑戦していきます。ここでの“出会い”を大切に、たくさんの人とふれあい、助け合い、人間として成長していきます。

募金活動を通して

生物生産学科2年 阿部 まりな

私が水産大学校に入学してから色々なことがありました。最近身近に起こった大きな出来事は、4月14日に起きた熊本地震で私の実家が被災したことです。幸いにも私の家族、親戚、友人は無事で、家屋にも大きな被害はありませんでした。

熊本地震に関する様々な情報が飛び交う中、震災直後に現地へ行く手段はなく、熊本に帰省することはできませんでした。もどかしい思いが募っている頃に、この水産大学校において熊本県出身の学生を

中心として募金活動をするようになりました。活動期間中には新聞記者からの取材もあり、多くの方に呼びかけを行うことができました。その結果として、学生や教職員の方々のご協力もあり、約39万円の義援金を集めることができました。山口県から出身地である熊本の復興に役に立つ活動ができるとは思ってもみなかったのも、協力していただいた方々には本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

募金活動の他にも、心配して声をかけてくれた友人や、相談にのってくれた学生部の方のおかげで、私は今も大学生活を送ることができています。水産大学校に入学し、多くの学生や教職員の方と出会って本当に良かったと思っています。

本校の研究科に進学して

水産学研究科1年 清水 拓

私はこの春に海洋生産管理学科を卒業し、水産学研究科に進学しました。私が所属する運用学研究室では、漁船や漁業従事者の安全性、または作業性の向上に関する研究テーマに取り組んでいます。本科では講義が主体でしたが、研究科ではそれら研究テーマに取り組む時間も多く、忙しい毎日を過ごしています。

私は現在、小型漁船における漁業従事者の安全性向上について研究を行っています。主に救命胴衣の研究をしています。水中や船上で着用実験を行い、救命胴衣のタイプや種類ごとの特性や性能を、実験等で得たデータを基に分析評価し、特に作業性の向上という側面から、救命胴衣の着用率向上、強いては漁船操業の安全性向上に貢献することを目的としています。漁業は就業者の高齢化、新規就業者の減少といった後継者問題など、様々な課題を抱える中で、これら研究テーマを通じて、将来も漁業の発展に携わっていきたくと思っています。

2年間という短い期間の中で、しっかり成長できるように気を引き締めて頑張りたいと思います。

クラブ紹介

サイクリング部

サイクリング部部长
海洋生産管理学科2年 中山 和正



私たちサイクリング部は毎週火曜・木曜に主に下関市内を自転車で走る等して活動しています。

また、パンク修理や交通安全などの自転車に関する講習を行ったり、月に一、二度ポタリングという普段では行けない遠い所に自転車で行くイベントを行っています。

サイクリングと聞くと、自転車でぶらりと出かけるという想像をする人が多いと思います。ですが、私たちはクロスバイクやマウンテンバイク、ロードバイクに乗って颯爽と走っています。思いきりペダルをこぎ、風を切って走る瞬間、何にも代え難い爽快感を感じます。また良い運動にもなるので、自転

車はただの交通手段というだけでなく、良いスポーツでもあると思います。

現在、部員は総勢43名、男子39名女子4名という構成になっており、活動は上記したものに加え、九月の末には二泊三日で長距離を走る旅行を行ったり、機会があればレースに参加したりと精力的に活動しています。

昨年度は「両輪で走る新朝鮮通信使」という日韓両国が主催する国交正常化50周年記念行事に招待されました。このイベントは、部活としては初の海外活動であり、両国の参加者と交友関係を築く等、素晴らしい体験ができました。これをはじめするサイクリング部の活動実績に対して学内表彰を受けましたことを嬉しく思います。

私たちサイクリング部は設立からまだ3年目です。これからは、より活発に活動し、もっと発展するように頑張っていきたいと考えています。

学生部だより

平成27年度における就職対策と進路状況について

学生部長(就職対策検討委員長) 須田有輔

本校では学内に「就職対策検討委員会」を設置して学生の就職支援を行っています。委員会は、委員長(学生部長)と各学科長および1年生～3年生のクラス担当教員からなる委員で構成され、事務局として学生課がこれを補佐しています。

主な活動は、(1) 3年生を対象とした自己分析・自己発見のための職務適性テストの実施。(2) 就職活動の専門講師やその他様々な分野で活躍されている講師を招いた就職ガイダンスの開催。(3) 就職手引き書「UniCareer マガジン—大学生の就職編—」を3年生全員に配布し、これを用いた就職指導。(4) 各学科の就職担当者および学生部職員

が、水産関連企業・団体等を訪問し、本校および本校学生の紹介を行うとともに、訪問企業等の採用情報の把握。(5) 毎年開催している合同企業説明会等です。

特に、本年3月5日(土)に開催された、本科3年生、専攻科進学予定の4年生および研究科1年生を対象とした合同企業説明会には、本校からの採用実績のある企業80社の参加があり、企業側、学生側から熱心な説明や質問が行われ、参加した学生からも好評を得ました。

このような活動の結果、平成27年度卒業・修了者の就職希望者166名(本科114名、専攻科45名、研究科7名)の就職率は98.2%で、このうち水産関連分野に85.9%が就職しました。

なお、本科、専攻科、研究科における進路状況および進学・就職内定先は別表の通りです。

平成27年度 卒業・修了者の進路状況

平成28年3月31日現在

本科 専攻科 研究科	修 了 者 及 び 数	進 学						就 職 希 望 者 数	就 職										進 路 未 定 者 数	就 職 率				
		大 学 院	研 究 科	専 攻 科	研 究 生 等	進 学 者 合 計	試 験 準 備 ・ そ の 他		水 産 関 連 分 野											内 定 者 合 計	水 産 関 連 分 野 者 就 職 希 望 (%)	水 産 関 連 分 野 者 就 職 内 定 (%)	全 体 就 職 率 (%)	
									国 家 公 務 員	地 方 公 務 員	各 種 団 体	漁 業 ・ 養 殖 業	水 産 加 工	水 産 流 通	調 査 開 発 等	資 材 機 材 等	小 計	そ の 他 分 野						
水産流通科	男	21	1	0	0	1	2	0	19	0	0	4	1	0	9	0	0	14	5	19	0	73.7	73.7	100.0
	女	7	0	0	0	1	1	0	6	0	0	2	0	0	3	0	1	6	0	6	0	100.0	100.0	100.0
海洋生産科	男	28	1	0	0	2	3	0	25	0	0	6	1	0	12	0	1	20	5	25	0	80.0	80.0	100.0
	女	36	2	2	20	1	25	0	11	0	0	4	0	2	1	1	2	10	0	10	1	90.9	100.0	90.9
海洋機械科	男	7	0	1	4	0	5	0	2	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	2	0	50.0	50.0	100.0
	女	43	2	3	24	1	30	0	13	0	0	4	0	2	1	2	2	11	1	12	1	84.6	91.7	92.3
食品科学科	男	45	1	2	24	0	27	1	17	0	0	0	1	0	1	0	11	13	4	17	0	76.5	76.5	100.0
	女	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-
生物生産学科	男	45	1	2	24	0	27	1	17	0	0	0	1	0	1	0	11	13	4	17	0	76.5	76.5	100.0
	女	22	1	3	0	0	4	0	18	0	1	0	0	7	6	0	0	14	3	17	1	77.8	82.4	94.4
計	男	123	1	0	0	0	1	0	12	0	1	1	0	7	3	0	0	12	0	12	0	100.0	100.0	100.0
	女	35	2	3	0	0	5	0	30	0	2	1	0	14	9	0	0	26	3	29	1	86.7	89.7	96.7
専攻科 船舶運航課程	男	31	0	2	0	2	4	0	27	0	7	1	0	4	11	0	0	23	4	27	0	85.2	85.2	100.0
	女	4	2	0	0	0	2	0	2	0	1	0	0	0	1	0	0	2	0	2	0	100.0	100.0	100.0
計	男	35	2	2	0	2	6	0	29	0	8	1	0	4	12	0	0	25	4	29	0	86.2	86.2	100.0
	女	155	5	9	44	4	62	1	92	0	8	9	2	13	28	1	13	74	16	90	2	80.4	82.2	97.8
専攻科 船舶機関課程	男	31	3	1	4	1	9	0	22	0	2	3	0	7	7	1	1	21	1	22	0	95.5	95.5	100.0
	女	186	8	10	48	5	71	1	114	0	10	12	2	20	35	2	14	95	17	112	2	83.3	84.8	98.2
計	男	23	0	0	0	0	0	23	2	0	3	0	0	9	0	4	18	4	22	1	78.3	81.8	95.7	
	女	2	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	1	0	1	2	0	2	0	100.0	100.0	100.0	
計	男	25	0	0	0	0	0	25	2	0	3	0	0	10	0	5	20	4	24	1	80.0	83.3	96.0	
	女	20	0	0	0	1	1	0	19	1	1	3	0	0	8	0	4	17	2	19	0	89.5	89.5	100.0
計	男	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	100.0	100.0	100.0	
	女	21	0	0	0	1	1	0	20	1	1	3	0	0	9	0	4	18	2	20	0	90.0	90.0	100.0
計	男	43	0	0	0	1	1	0	42	3	1	6	0	0	17	0	8	35	6	41	1	83.3	85.4	97.6
	女	3	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	2	0	1	3	0	3	0	100.0	100.0	100.0	
計	男	46	0	0	0	1	1	0	45	3	1	6	0	0	19	0	9	38	6	44	1	84.4	86.4	97.8
	女	4	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	2	1	1	4	0	4	0	100.0	100.0	100.0
研究科	男	3	0	0	0	0	0	3	0	0	1	0	0	0	0	0	2	3	0	3	0	100.0	100.0	100.0
	女	7	0	0	0	0	0	7	0	0	1	0	0	2	1	3	7	0	7	0	100.0	100.0	100.0	
総合計	男	202	5	9	44	5	63	1	138	3	9	15	2	13	47	2	22	113	22	135	3	81.9	83.7	97.8
	女	37	3	1	4	1	9	0	28	0	2	4	0	7	9	1	4	27	1	28	0	96.4	96.4	100.0
総合計	男女計	239	8	10	48	6	72	1	166	3	11	19	2	20	56	3	26	140	23	163	3	84.3	85.9	98.2

【就職先の分類】

水産関連分野

- 各種団体：水産に関する団体（漁業、流通、船舶等関係団体）
- 漁業・養殖業：水産動植物の採捕又は養殖の事業者
- 水産加工：水産動植物を原料又は材料として、食料、肥料その他の有用物を生産する事業者
- 水産流通：水産物の貯蔵、運搬、販売等の流通に関する事業者
- 調査開発等：海洋水産関連の調査会社
- 資機材供給等：水産業やそのサービス部門等に資機材供給等を行う関連事業者
- その他：水産業関連分野以外の公務員・団体・企業など

平成27年度卒業生進学・就職状況一覧表

平成28年3月31日現在

<p>◎進学(大学院等)</p> <p>九州工業大学大学院 東京海洋大学大学院 北海道大学大学院 三重大学大学院 宮崎大学大学院</p>	<p>日本海事検定協会 日本海洋レジャー安全・振興協会 日本冷凍食品検査協会 兵庫県漁業協同組合連合会 山口県漁業協同組合</p>	<p>山陽食品工業 JRCS 下関漁業 商船三井 商船三井オーシャンエキスパート 商船三井フェリー 常洋水産 新出光 新来島どっく 新日本海フェリー 新日本環境調査 生活協同組合おおさかパルコープ 関ヶ原製作所 瀬戸内海汽船 センコー ダイイチ ダイキンアプライドシステムズ 大東魚類 大都魚類 ダイハツディーゼル 大洋エーアンドエフ 太洋日本汽船 大和海運 タカミヤ TASAKI 田中食品 中冷 築地魚市場 漬新 デイドリーム 東亜建設工業 東海澱粉 東京一番フーズ トライデント・シーフード・アジア・インク 西島製作所 長崎市 西日本旅客鉄道 日東製網 日本郵船</p>	<p>日本ミクニヤ 八馬汽船 春風海運 阪食 日阪製作所 日立ジョンソンコントロールズ 空調 広島魚市場 広島市信用組合 備後漬物 ファミリープロジェクト フィッシングマックス フォーラムエンジニア 福岡魚市場 不二輸送機工業 フランソア ベニレイ 朋昆 前川製作所 松岡 丸久 丸共通運 マルハチ マルヨ水産 ミキモト 美須賀海運 ミックコーポレーション みなと山口合同新聞社 やずや ヤマエ久野 ヤンマーエネルギーシステム ランテック ワールドスポーツ</p> <p style="text-align: right;">五十音順</p>
<p>◎就職</p> <p>官公庁</p> <p>気象庁(船舶) 水産庁(船舶) 青森県 大分県 大分県(船舶) 鹿児島県 静岡県警察 島根県 福井県 北海道 山口県 廿日市市 広島市消防局 湯沢町</p>	<p>民間企業等</p> <p>朝日共販 朝日工業社 あじかん アピ イコース 伊勢湾海運 一番食品 いであ 出光タンカー エームサービス オーケー 大島造船所 オーシャントランス オリジン東秀 カクサン食品 鹿児島船舶 金子産業 川崎汽船 川崎近海汽船 極洋 旭洋造船 クニヒロ クラハシ クラレイ 栗林マリタイム ケンコーマヨネーズ 興亜工業 五栄土木 近藤海事 サンエイコンサルティング 山九</p>	<p>各種団体</p> <p>東町漁業協同組合 ありだ農業協同組合 海洋水産システム協会 香川県漁業協同組合連合会 岐阜県魚苗センター 新日本検定協会 水産研究・教育機構 水産研究・教育機構(船舶) 全国漁業共済組合連合会 全国さんま棒受網漁業協同組合 東京海洋大学(船舶) 長崎県漁船保険組合</p>	<p>五十音順</p>

平成28年度入試状況

本校の平成28年度入試状況をお知らせします。

推薦・一般入試の志願者総数は、913名でした。

昨年11月に実施された推薦入試には、全学科で160名の応募があり、また、今年2月に実施された一般入試には全学科で753名の応募がありました。

一般入試の学科別応募状況は、水産流通経営学科36名(募集人員13名に対する倍率3.0倍)、海洋生産管理学科146名(募集人員23名に対する倍率6.3倍)、海洋機械工学科115名(募集人員28名に対する倍率4.1倍)、食品科学科136名(募集人員27名に対する倍率5.0倍)、生物生産学科320名(募集人員18名に対する倍率17.8倍)でした。

一般入試の過去6年間の志願者数の推移は、22年度653名、23年度675名、24年度665名、25年

度840名、26年度859名、27年度755名でした。

平成28年度入試の志願者総数(推薦・一般)は913名で対前年度比95.8%の結果となり、推薦入試の志願者数は前年度に比べ38名減となったものの一般入試の志願者数が753名で昨年度並みとなりました。

これまで、より多くの受験生を確保するための対策として、教育職員による高校訪問、事務職員が対応する業者主催の進学ガイダンスセミナーへの参加、インターネットを用いた情報提供など、様々な広報活動を行ってきました。

今後もこれら対策の強化を続けると共に、本校の特色と個性豊かな教育方針を全面に打ち出し、魅力ある大学校となるように一層の努力を行う所存です。